

## 読み方の指導

——「大造じいさんとガン」を通して——

廣田隆志

はじめに

私が所属している「日本国語教育学会岐阜県支部」では、平成十五年度から三年継続して「魅力ある国語教室の創造」というテーマに取り組んでいる。本年度（平成十七年度）の夏季研修会でも「学び合いとコミュニケーション能力」の実践報告・交流がなされた。

「魅力ある国語教室」とは素直に考えれば、子供たちが国語を好きになったり、国語の授業が楽しいと思ったり、もっと国語の勉強をしてみたいと意欲を喚起したりすることである。そして、そんなプロセスの中で、確かな国語の力を身につけることであろう。そのためにはどうしたらよいのか。それが「国語教室の創造」の「創造」に当たるところであろう。

この「魅力ある国語教室の創造」について、「読むこと」の領域で述べる。

### 一 子供からのメッセージ

私は大垣市立東小学校で最初の退職を迎えたが、その年度の二期後半から三期前半にかけて、約六十時間の授業を行った。これは退職を迎える国語の教師である私への粹なはからいだったと理解しているが、「よかったら、私の学級で国語の授業をして下さい。」という誘いを何人かの先生方から受けたからである。退職を前に、国語の授業ができるといううれしさやありがたさ、まさに国語教師の冥利に尽きる思いであった。

仕事や時間の都合もあって、誘いのすべての学級で授業を行うことはできなかったが、それでも一年生と四年生は一学級ずつ、五年生は三学級の全五学級で行うことができた。授業はすべてティーム・ティーチングで行い、T1である私が授業を進行し、T2の教務主任が板書を、T3の学級担任が子供の指名を、と役割を分担した。

五年生の授業での教材は「大造じいさんとガン」(五年下・光村図書)であった。全授業の終了後、子供たちから多くのメッセージが届いた。まず、そのメッセージをいくつか紹介する。それは、子供たちにとって「魅力ある国語教室」であったかどうかの検証でもある。

「大造じいさんとガン」を七時間も教えてくださって、ありがとうございました。

校長先生が教えてくださったおかげで二十個も読み取りの視点がわかりました。

最初はどうかやって読み取ればいいのかわかりませんでした。でも、読み取りの視点を覚えていくうちに、たくさん読み取れるようになりました。たくさん読み取れるようになってから自信がつき、前よりは挙手ができるようになりました。

今まで国語はあまり楽しいと思わなかったけれど、校長先生が読み取りの視点を二十個も教えてくださったので、国語が楽しくなりました。(S・K)

「大造じいさんとガン」の勉強を教えてください、ありがとうございます。わたしは読み取りを今までに何回かしたことがある

のに、こんなにためになったのは初めてでした。今までは、言葉から様子や気持ちだけしか読み取ることができませんでした。

けれども、語り手の目、言葉の表現の仕方、ぎ音語、ぎ態語、プロミネンスなど、今まで知らなかった読み取り方を教えてください。そのため、立ち止まれた言葉の数が始めよりずっと増えました。それだけでなく、大造じいさんや残雪の気持ちや様子などが、教科書に書いてなかったことまで見つけられるようになりました。作者の棕鳩十さんが、大造じいさんのどんな生き方に感動して、この物語を書いたのかもわかるようになりました。

教えていただいた読み取り方は、次の読み取りにも生かしたいと思います。(M・H)

国語の「大造じいさんとガン」では、何ランクもアップした読み取りができました。例えば、プロミネンスは作者がこのことをもっと考えてほしいと強調して書いていることがわかったり、情景はその時の風景から大造じいさんや残雪の気持ちを読み取ることができたりすることがわかりました。また、わかりにくい所は図で関係を表すことでその場面がよくわかりました。語り手の視点では、語り手のいる位置をしっかり知ることができました。言葉と言葉をつなげるでは、二つの言葉をつなげることで、一つの言葉よりもっと

その時の様子がよくわかりました。遠近法では、残雪やハヤブサがだんだん遠くへ行ったり近くに來たりする様子がよくわかりました。これらの読み方を六年生でも生かしたいと思います。(S・M)

わたしは、校長先生に国語の授業を教えていただく前はとっても国語が苦手でした。でも、校長先生に教わってから読み取りのコツや書き方をうまく使いこなせるようになりました。一場面の時は、読み取りが一、二個ぐらいだったけど、今では十八個ぐらいの言葉に着目することができるようになりました。

表現の工夫と初めてだれかが言った時、「表現の工夫って何だろう」と思って聞いていました。けれど、「ぱっ ぱっ ぱっ」というのはぎ音語で、これはその場にいるような感じがわかるなどと表現の工夫について、くわしく教えていただいたおかげでよくわかるようになりました。

校長先生と勉強する前は、ちゃんについていけるかなという不安ばかりでした。でも発表をしていくうちに、みんなについていけるようになりました。とってもいい勉強になりました。(C・S)

国語の時間、ありがとうございました。

一時間一時間のつまかかねで、だんだんと国語の時間での交流が

とても楽しくなりました。それは、言葉と言葉をつなげて読み取ったり、情景や一文の長さで気持ちを読み取ったりできるようになったからです。また、句読点で強調する表現の工夫は、場面を想像できるとなりになり、使いこなせるようになったという楽しさもあったからです。

さらに、校長先生に教えていただいた、語り手の視点や遠近法などの表現の工夫を見つけて、場面をもっと深く読み取ることができるようになったり、言葉に注意深く着目できるようになったりしてきました。

このような技をもっと使って、物語を読み取りたいと思うようになりました。また、これからの国語の物語では、新しい表現の工夫を見つけていきたいと思っています。(A・M)

始めの内、国語の読み取りが好きではありませんでした。でも、ぼくがほとんど読み取る文がないと思っていた所でも、校長先生が次から次へといろいろな着目文を教えてくださいださって、こんなに多くあるなんておどろきました。途中から、多くの文に着目するのが楽しみになりました。ほかに「ぎ人法」「ぎ音語」「ぎ態語」などを使った文から、どのように伝えたかったのかなどを読み取れるようになりました。特に、こんなからでも読み取れるんだと思った

文は、「ぱっ ぱっ」の文です。句点が二つないだけで、スピード感を出せるなんておどろきました。

たった三週間ほどのことだったけど、とても楽しい国語の時間でした。(Y・H)

私は、小学校に入ってから国語が大好きでした。そして、今回、校長先生に授業を教えていただくというきちょうな体験は、とてもすばらしいものでした。中でも、情景やちよとした文末、そして、読点、プロミネンスに気をつけるということは、今までになく、すばらしい読み取りの技でした。今までは、形式段落などからの読み取りばかりだったところからさらに深い気持ちなども分かるようになります。また、短い文からのスピード感、現在形の文末などは私の思いもよらないことでした。

物語の中では、じいさんの言葉の中の「あゝの残雪め」の「め」という一つだけの文字による意味のちがいが、また、語り手の視点の位置では、先まわりして見ていたり、同じであったり、近くで見ていたりといった細かくて、さらに深い読み取り方法を教えてくださいました。

最近では、他の物語を読んでも、自然に読み取りをしています。

(I・K)

「大造じいさんとガン」の物語の勉強で、始めのうちはあまり上手に読み取りができませんでした。語り手の視点から読むことや図で書いてみるなどができませんでした。でも、だんだんやっていくうちに、いろいろな技が使えるようになりました。

発表をすると、校長先生が「もう少し、うらのことも考えるといいですよ。」とアドバイスをしてくださったり、「そのように読み取るといいですね。その調子。」などとほめてくださったりするので、私は「ガンバロー」という気持ちになりました。それで挙手を授業が終わるまで何度も挙げ続けました。そして、だんだん国語の時間が楽しくなりました。

前までは、国語の時間が一番きらいでした。でも、今は発表がたくさんできるようになり、国語の時間は教科の中で一番好きな教科になり、とても楽しいです。(S・K)

国語の時間、いろんな読み取り方を教えてくださいありがとうございました。

大造じいさんと語り手の目が重なっているとか、「」のつけ方によって、話している時と思っている時があることが分かりました。言葉と言葉をつなげると、気持ちがだんだん分かってきました。気

持ちの変化はどの言葉から分かるのかをはっきりさせないといけないということも分かりました。こういう読み取り方があるとは、全然知りませんでした。おかげで分かりやすいノート作りができました。

ちがうことを言うと「ちがう。」とおっしゃってくださったので、「まちがった読み取りをしていたんだなあ」と気づくことが出きました。おいしい読み取り方は、「おいしい。でも、近づいてきているよ。」と教えてくださるので、「近づいてきているけど、あともう少ししかあ」と思いました。

じょうずな読み取り方をすると「あの子みたいな読み取りが出きるといいねえ。」とおっしゃってくださるので、「よし、今みたいな読み取りをしよう」と思いました。(A・M)

わたしは校長先生に、三つのことを教えていただきました。

一つ目は、一つ一つの言葉に着目して様子や気持ちを見つけることです。わたしは、最初一〜三回ぐらい読んでから、ふと見つけたことをメモしていたのですが、だんだん言葉に着目できるようになり、様子や気持ちが分かるようになりました。

二つ目は、前の場面とつなげるということです。前までは、着目した場面しか見つけてなくて、前の場面は全然見ていませんでした。

校長先生とやっていくうちに、前の場面とつなげてどのように変わったかを見ていくことができるようになりました。

三つ目は、大造じいさんと語り手の目はどこにあるのかということです。「わらぐつの神様」の勉強では、目など気にしていなかったのですが、校長先生がおっしゃったことにとってもびっくりしました。わたしも少しずつ語り手の目のことが分かってきたので、もっともつとがんばりたいです。(Y・K)

わたしが、この「大造じいさんとガン」でつけた力は、三つあります。

一つ目は、「よく似た言葉とつなげる」です。教えていただいたおかげで、一回の読み取りで必ず二、三個は見つけられるようになりました。

二つ目は、「言葉と言葉をつなげる」です。「ぱっ　ぱっ」「よるめきながら」「もつれあって」からすごい戦いになったことが分かるなど、ぎ音語・ぎ態語から考えることができるようになりました。

三つ目は、表現の技法です。わたしは「大造じいさんとガン」の勉強を終えてから、物語文を七さつぐらい読みました。今まで、気づかなかった所に、遠近法、語り手の視点、現在形、過去形、プロミネンスなどがたくさんあることに気づきました。

本の内容が深く分かり、本を読むのが楽しくなりました。

(S・K)

校長先生が、いろんなことを教えてくださったので、国語の授業で「つなぎ発言」や「付け足し発言」ができるようになりました。校長先生の授業は分かりやすく、私は自分なりに国語のいろんな力が身についたと思います。

最初の方は、読み取りの視点をあまり使えなかったけれど、だんだんと使えるようになりました。一学期や二学期以上に、国語の力がつきました。この力は、六年生になっても中学生になっても忘れずに、授業に生かしていきたいです。

国語は苦手だったけれど、自信がつきました。国語の時間にできた宝物は自信です。

国語のまとめ方もうまくなりました。それに挙手回数や反応回数も増えました。

(A・M)

一年～四年まではやったことのないことを、校長先生から教えていただいて、国語の力がとても身につきました。前は、国語の時間がいやだったけど、「大造じいさんとガン」の話し合いはとても楽しかったです。二十個の読み取り方が分かったので、とても国語の

力がつきました。前の国語の授業より楽しくできたし、発表もいっぱいできました。

ぼくは、とてもまとめの仕方がへただったけど、うまくまとめができるようになりました。

(M・N)

国語の時間がとても楽しかったです。校長先生に自分の読み取ったことを聞いてほしいという気持ちがあったので、充実した気持ちで授業が受けられました。

挙手も「わらぐつの中の神様」の時より、倍も挙げられました。ノートに書いていないことでも、その場ではっと思いつき発表できました。

点検表はどんどん丸がついていき、「明日はここに気をつけよう」や「ここは明日もつくといいな」など目標を立てて、読み取りができました。

二十個の読み取りの視点を、全部はまだ達成できていないけど、少しでも生かして最高の授業にしたいです。

(U・A)

「大造じいさんとガン」の学習で、いろいろなことが身につきました。

例えば、挙手のことです。初めの方は、一時間に一～三回ぐらい

しか挙手していませんでした。でも、授業が進んでいくうちに、十  
〜二十回ぐらい挙手して、発表も初めよりするようになりました。

もう一つは、読み取りのポイントのことです。一つの言葉からだ  
けではなく、二つ言葉をつなげたり、前の場面とつなげたりして読  
み取れるようになりました。二十のポイントの中から、十ぐらいの  
ポイントを使って読み取ることもできるようになりました。

この二つのことが身についたので、もっと力をつけて、六年生の  
授業に生かしていきたいと思います。(S・M)

十五人の子供たちのメッセージを紹介してきたが、冒頭で述べた  
ような「魅力ある国語教室」であったのかどうかの検証を試みた  
い。その観点は、「魅力ある国語教室」とは「子供たちが国語を好  
きになったり、国語の授業が楽しいと思ったり、もっと国語の勉強  
をしてみたいと意欲を喚起したりすることである。そして、そんな  
プロセスの中で、確かな国語の力を身につけることであろう」と述  
べた内容である。それを次のような三点から見えていくことにする。  
ア 国語を好きになったり、国語の授業が楽しいと思ったりするよ  
うになった内容

イ もっと国語の勉強をしてみたいと意欲の喚起が見られる内容

ウ 確かな国語の力(読むことの力)が身についたと思っっている

## 内容

### ① S・K

ア 「今まで国語はあまり楽しいと思わなかった」から「国語が楽  
しくなりました」へと変容している。

イ 「たくさん読み取れるようになってから自信がつき、前よりは  
挙手ができるようになりました」と挙手が意欲の喚起を表してい  
る。

ウ 「最初はどうかやって読み取ればいいのかわかりませんでした」  
から「たくさん読み取れるようになりました」と読み取る力が身  
についたことを述べている。

### ② M・H

イ 「読み取り方は、次の読み取りにも生かしたい」という意欲。

ウ 「こんなになれたのには初めてでした」という自覚。「立  
ち止まった言葉の数が始めよりずっと増えました」「大造じいさ  
んや残雪の気持ちや様子などが、教科書に書いてなかったことま  
で見つけられるようになりました」「作者の椋鳩十さんが、大造  
じいさんのどんな生き方に感動して、この物語を書いたのかもわ  
かるようになりました」という手応え。

### ③ S・M

イ 「これらの読み方を六年生でも生かしたいと思います」という意欲。

ウ 「何ランクもアップした読み取りができました」として、アップした内容として、プロミネンス、情景と気持ち、関係図、言葉と言葉をつなぐこと、遠近法を上げている。

④ C・S

ウ 「読み取りのコツや書き方をうまく使いこなせるようになりしました」として、「一場面の時は、読み取りが一、二個ぐらいだったけど、今では十八個ぐらいの言葉に着目できるようになりました」とその例を上げている。

⑤ A・M

ア 「だんだんと国語の時間での交流がとて楽しくなりました」  
イ 「このような技をもっと使って、物語を読みたいと思うようになりしました」「これからの国語の物語では、新しい表現の工夫を見つけていきたいと思っています」という意欲。

ウ 「句読点で強調する表現の工夫は、場面を想像できるようになり、使いこなせるようになったという楽しさもあったからです」と力がついたこととそこから楽しさも述べている。また、「場面をもっと深く読み取ることができるようになった」「言葉に注意深く着目できるようになった」ことも上げている。

⑥ Y・H

ア 「始めの内、国語の読み取りが好きではありませんでした」から「途中から、多くの文に着目するのが楽しみになりました」「とても楽しい国語の時間でした」という変容が見られる。

ウ 『『ぎ人法』『ぎ音語』『ぎ態語』などを使った文から、どのように伝えたかったのかなどを読み取れるようになりました』と力がついたことを述べている。

⑦ I・K

ウ 「さらに深い気持ちなども分かるようになりました」「最近では、他の物語を読んでも、自然に読み取りをしています」と力が定着したことを上げている。

⑧ S・K

ア 「だんだん国語の時間が楽しくなりました」「国語の時間は教科の中で一番好きな教科になり、とても楽しいです」と変容。

イ 「私は『ガンバロー』という気持ちになりました」「挙手を授業が終わるまで何度も挙げ続けました」という意欲の表れ。

⑨ A・M

イ 「じょうずな読み取り方をすると『あの子みたいな読み取りが出きる』といいねえ。」とおっしゃってくださるので、『よし、今みたいな読み取りをしよう』と思いました」



という意欲。

⑩ Y・K

イ 「少しずつ語り手の目のことが分かってきたので、もっとがんばりたいです」と理解するにつれての意欲。

ウ 「だんだん言葉に着目できるようになり、様子や気持ちが分かるようになりました」「前の場面とつなげてどのように変わったかを見ていくことができるようになりました」とできるようになったことを上げている。

⑪ S・K

ア 「本の内容が深く分かり、本を読むのが楽しくなりました」と読書の楽しさに触れている。

ウ 「一回の読み取りで必ず二、三個は見つけられるようになりました」「ぎ言語・ぎ態語からも考えることができるようになりました」と力がついたことを上げている。

⑫ A・M

ア 「国語は苦手だったけれど、自信ができました」と変容。

イ 「この力は、六年生になっても中学生になっても忘れずに、授業に生かしていきたいです」「それに挙手回数や反応回数も増えました」からは、力がついたことによる意欲の表れを伺い知ることがができる。

ウ 「私は自分なりに国語のいろんな力が身についたと思います」

「二学期や三学期以上に、国語の力がつきました」「国語のまとめ方もうまくなりました」という自覚。

⑬ M・N

ア 「前は、国語の時間がいやだったけど、『大造じいさんとガン』の話し合いはとても楽しかったです」と変容。

ウ 「国語の力がとても身につきました」「二十個の読み取り方が分かったので、とても国語の力がつきました」「とてもまとめの仕方がへただったけど、うまくなるとめができるようになりました」という自覚。

⑭ U・A

ア 「国語の時間がとても楽しかったです」「充実した気持ちで授業が受けられました」と楽しさ・充実感。

イ 「『明日はここに気をつけよう』や『ここは明日もつくと（丸が）いいな』など目標を立てて、読み取りができました」「二十個の読み取りの視点を、全部はまだ達成できていないけど、少しでも生かして最高の授業にしたいです」という意欲。

⑮ S・M

イ 「もっと力をつけて、六年生の授業にいかしていきがんばりたいです」という意欲。

ウ 「いろいろなことが身につきました」の「いろいろ」は、「一  
つの言葉からだけではなく、二つ言葉をつなげたり、前の場面と  
つなげたりして読み取れるように」なったことや「十ぐらいのポ  
イントを使って読み取ることもできるように」なったことを上げ  
ている。

この十五人は、なるべく内容が重ならないように抽出をしたので  
あるが、三つの観点の内、アは八点、イは十点、ウは十二点が記述  
されている。こんなことから、子供たちの自己評価ではあるが、子  
供たちにとって「魅力ある国語教室」であったと言えるのではない  
かと思われる。

## 二 授業構想

- |     |                |        |        |
|-----|----------------|--------|--------|
| (1) | 教材文「大造じいさんとガン」 | 椋 鳩十・作 | (五年下 光 |
|     | 村図書)           |        |        |
| (2) | 教材解釈           |        |        |
| (3) | 本時の目標          |        |        |
| (4) | 発問             |        |        |
| (5) | まとめの板書         |        |        |
| (1) | 教材文 《プロローグ》    |        |        |

① 知り合いのかりゅうどにさそわれて、わたしは、② イノシシがり  
に出かけました。③ イノシシがりの人々は、みな栗野岳④ のふもとの、  
⑤ 大造じいさんの家に集まりました。じいさんは、⑥ 七十二歳⑦ だとい  
うのに、⑧ こしひとつ曲がっていない、元氣な老かりゅうどでした。  
⑨ そして、かりゅうどのだれもがそうであるように、なかなか話し  
上手の人でした。⑩ 血管のふくれたがんじょうな手を、いろいろのた  
き火にかざしながら、⑪ それからそれと、愉快なかりの話をしてく  
れました。⑫ その話の中に、今から三十五、六年も前、まだ栗野岳  
のふもとのぬま地に、⑬ ガンがさかんに来たころの、⑭ ガンがりの話  
もありました。わたしは、その折の話を土台として、この物語を  
書いてみました。

さあ、大きな丸太がパチパチと燃え上がり、しょうじには自在  
かぎとなべのかげがうつり、すがすがしい木⑮ のにおいのするけむ  
りの立ちこめている、山家⑯ のろばたを想像しながら、この物語を  
お読みください。

## (2) 教材解釈

### ① 「知り合いのかりゅうど」

・ 動物を取り上げた作品が多いことから、知己のかりゅうどと  
の交流があったのであろう。

・ 狩人（かりびとが変化） ↓ かりうど ↓ かりゅうど

②「わたし」

・ プロローグであることから、この「わたし」は「語り手」ではなく、作者・棕 鳩十自身と考えられる。

・ 棕 鳩十

一九〇五年（明治三十八年）～一九八七年（昭和六十二年）。

長野県出身。本名は久保田彦穂。長く教師をし、戦後に鹿児島県立図書館長となる。山窩や動物を取り上げた作品が多い。

③「イノシシがりに出かけました」

・ かりゅうどから取材して書くだけではなく、実際の狩りの体験をしていたことが分かる。

④「栗野岳のふもと」

・ 狩りをするのに便利な所に住んでいる。

⑤「大造じいさんの家に集まりました」

・ かりゅうどたちから、経験が豊かで腕がよくて慕われている。かりゅうどたちの頭領的な存在。

⑥「七十二歳だというのに」

・ 「だ」によって七十二歳を強調し、そんな高齢なのに。

⑦「こしひとつ曲がっていない」

・ 七十二歳の高齢ともなれば、腰が曲がるのが普通だがそれす

らない。

⑧「かりゅうどのだれもがそうであるように」

・ どのかりゅうども話し上手であるが、その例にもれず大造じいさんも。

⑨「なかなか話し上手」

・ 「なかなか」……ずいぶん、相当に、かなり

・ 狩で多くの体験をしているから、話題も豊富。

⑩「血管のふくれたがんじょうな手」

・ 働き者、力仕事（猟銃や重い獲物の運搬など）をしてきたから。

⑪「それからそれ」

・ 次々に続く、次から次へと

⑫「今から三十五、六年も前」

・ 大造じいさんが三十七、八歳の頃、働き盛り。

⑬「ガンがさかんに来たころ」

・ 栗野岳の麓の沼地に、ガンが来たのは三十五、六年も前のことで、今は来ない。

⑭「ガンがりの話も」

・ 「も」……ガン以外の動物の狩の話もあり、ガン狩の話も。

⑮「話を土台として」

・ そのままの話でなく、その話をもとにして創作（フィクション）

ン)した話。

⑩ 「パチパチ」

・ 音——耳（聴覚）からの描写

⑪ 「かげがうつり」

・ 目（視覚）からの描写

⑫ 「木のおいのするけむり」

・ 鼻（臭覚）からの描写

(3) 本時の目標

元気な老かりゅうどの大造じいさんから聞いた「ガンがり」の話を土台にして、「大造じいさんとガン」の物語ができたことを読み取ることができる。

(4) 発問

- (a) かりゅうどに知り合いがいるということから、分かることは何か。
- (b) 「かりゅうど」という言葉は、どんな言葉からできたか。
- (c) 「わたし」とは、誰のことか。
- (d) 「イノシシがりに出かけました」から作者のどんなことが分かるか。
- (e) 大造じいさんの家が栗野岳のふもとにあることから、何が分かるか。

るか。

- (f) 「みな」「集まりました」から、大造じいさんのどんなことが分かるか。

- (g) 「七十二歳だというのに」と「七十二歳というのに」と比べてみると、どう違うか。そのことからどんなことが分かるか。

- (h) 「こしひとつ曲がっていない」と「こしが曲がっていない」と比べてみると、どう違うか。そのことからどんなことが分かるか。

- (i) 「なかなか話し上手」の「なかなか」を別の言い方にするとどうなるか。また、かりゅうどはなぜ話し上手なのか。

- (j) 「血管のふくれたがんじょうな手」から、どんなことが分かるか。
- (k) 「それからそれ」を別の言い方にするとどうなるか。

- (l) 「今から三十五、六年も前」だと大造じいさんは、何歳の頃か。その歳の頃からどんなことが分かるか。

- (m) 「ガンがさかんに来たころ」とあるが、今はどうなのか。

- (n) 「ガンがりの話」とあるが、ガン以外のどんな動物の狩の話があったかを想像しよう。

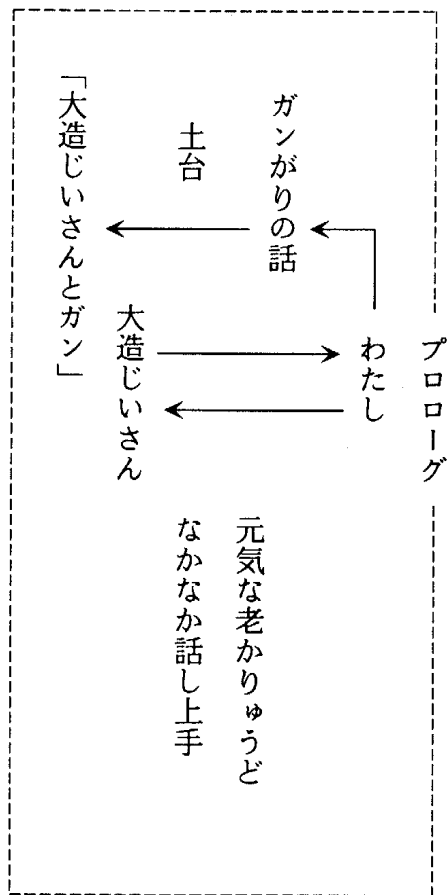
- (o) 「話を土台として」「物語を書いてみました」とあるが、どんなつくり方をしたか。

- (p) 「パチパチ」「かげがうつり」「木のおいのするけむり」の描き方は、人間の感覚の何を使って表現されているか。

(5) まとめの板書

授業の終末でのまとめは、「あいだの感想」、場面の小主題、「ひとり読み」に先生や友だちの教えや意見を付加したり修正したりするなどがある。しかし、四十五分の中で時間を十分に用意してまとめさせるというのは、先生にとっても子供にとってもなかなか難しいことである。そこで、「もの・ことの相関関係」を図で表す方法を取り入れた。

「もの・こと」の「もの」とは「者」「物」のことであり、「こと」は「出来事」のことである。それがどのような関係になっているかを図で示し、その関係をキーワードで表すというものである。この関係図でまとめをしておけば、他のまとめの方法にも活用できるからである。



(1) 教材文 《第一場面》

①今年も、残雪は、②ガンの群れを率いて、ぬま地にやって来ました。

残雪というのは、一羽のガンにつけられた名前です。左右のつばさ③に、真④白な交じり毛⑤を持っていたので、かりゅうどたちからそうよばれていました。

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、⑥なかなかりゅうなやつで、⑦仲間がえを⑧あさっている間も、⑨油断なく⑩気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで、⑪決して人間を寄せつけませんでした。

大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、⑪一羽のガンも手に入ることができなくなったので、⑫いまいまいしく思っていました。

そこで、残雪がやって来たと知ると、大造じいさんは、⑬今年こそはと、⑭かねて考えておいた特別な方法に取りかかりました。

それは、いつもガンのえをあさる辺り一面に⑮くいを打ちこんで、タニシを付けたウナギつりばりを、たみ糸で結び付けておくこと⑯でした。じいさんは、⑰一晩じゅうかかって、たくさんウナギつりばりをしておきました。今度は、⑱なんだかうまくいきそう⑲な気がしてなりませんでした。

(2) 教材解釈

①「今年も」

- ・ 昨年も、その前から

②「ガンの群れを率いて」

- ・ 残雪がガンの頭領であること。

③「真っ白な交じり毛」

- ・ 「真っ白」から雪、それが一か所ずつあることから雪の残り  
と見立てて残雪。

④「そうよばれて」

- ・ かりゅうどたちから、一目置かれていた、注目されていたこ  
と。

⑤「頭領らしい」

- ・ 頭領にふさわしい、頭領の器にぴったりの、頭領として風格  
のある、いかにも頭領と思われる。

⑥「なかなかりこう」

- ・ 「なかなか」――ずいぶん、相当に、かなり

⑦「仲間がえをあさっている間も」

- ・ 「漁る」――探し求める
- ・ 「えをあさる」時は、夢中で警戒が甘くなりがちなので、そ  
の間も。

⑧「油断なく気を配っていて」

- ・ 頭領として仲間を守ろうとする姿。

⑨「りょうじゅうのとどく」

- ・ りょうじゅうの（たまの）とどく――省略
- ・ かりゅうどを警戒
- ・ りょうじゅうの恐ろしさを知っている。

⑩「決して人間を寄せつけません」

- ・ 「決して」ない（強調）――決して近寄らせない、決して  
受け入れない。

⑪「一羽のガンも手に入れることができなかった」

- ・ 残雪の頭領としてのすばらしさ、すごさ。
- ・ 残雪が仲間を確実に守り切っている。

⑫「いまいまして」

- ・ かりゅうどとしてのプライド、腹立たしさ、癪にさわる

⑬「今年こそは」

- ・ かりゅうどとしての意地、意気込み。

⑭「かねて考えておいた特別な方法」

- ・ 「かねて考えておいた」――前々から（残雪が来る前から）  
作戦を立てていた。
- ・ 「特別な方法」――りょうじゅうを使わない方法

⑮ 「くいを打ちこんで、タニシを付けたウナギつりばりを、たたみ糸で結び付けておくこと」

- ・ 特別な方法の説明

- ・ 手の込んだ方法

⑯ 「一晩じゅうかかって」

- ・ 手間のかかる方法、大量に準備

- ・ かりゅうどとしての意気込み。

⑰ 「なんだかうまくいきそうな気がして」

- ・ 特別な方法だから、丹念に用意したから、大量に準備したから

- ・ 次の場面の布石

(3) 本時の目標

残雪をいまいましく思っている大造じいさんは、特別な方法でガンを手に入れようと準備をし、うまくいきそうな気がしていることを読み取ることができる。

(4) 発問

(a) 「今年も」と「今年は」とを比べてみよう。

(b) 「ガンの群れを率いて」から、残雪のどんなことが分かるか。

(c) 残雪という名前は、どういうことからついたのか。

(d) かりゅうどがガンに名前をつけて呼ぶのは、残雪に対してどう思っていたからか。

(e) 「頭領らしい」の「らしい」を別の言葉で言い替えてみよう。

(f) 「なかなか」を別の言葉で言い替えてみよう。

(g) 「えをあさっている」時は、どんな様子になるか。

(h) 「油断なく気を配っていて」から、残雪のどんなことが分かるか。

(i) 残雪は「りょうじゅう」の恐ろしさをなぜ知っているのかを想像してみよう。

(j) 「決して人間を寄せつけません」を「決して人間をくれない」という言い方にしてみよう。

(k) 「一羽のガンも手に入れることができなかった」ということから、残雪のどんなことが分かるか。

(l) 「いまいましく」を別の言葉で言い替えてみよう。また、大造じいさんは、なぜそんな思いになっているのか。

(m) 「今年こそは」と「今年は」を比べてみるとどう違うか。また、「今年こそは」から大造じいさんのどんなことが分かるか。

(n) 「かねて考えておいた」から、大造じいさんの何が分かるか。

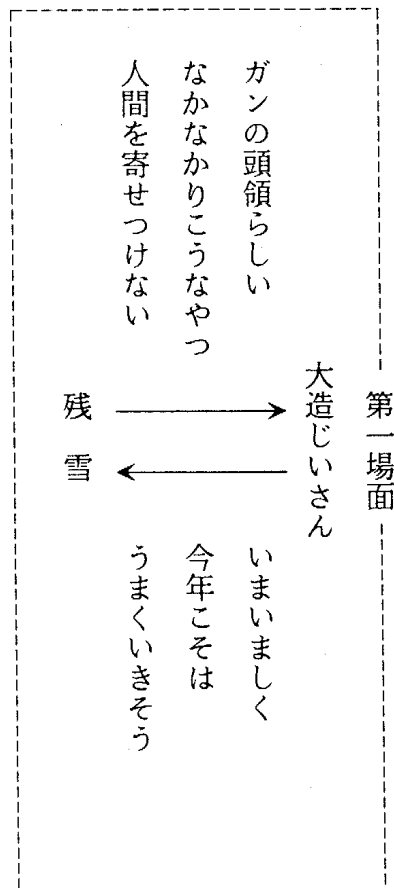
(o) 「特別な方法」のヒントになる言葉はどれか。

(p) 「特別な方法」を説明している文はどれか。

(q) 「一晩じゅうかかって」から、分かることは何か。

(r) なぜ「なんだかうまくいきそうな気が」したのか。また、このような表現の仕方をどう言うか。

(5) まとめの板書



(1) 教材文 《第二場面》

よく日の昼近く、じいさんはむねをわくわくさせながら、ぬま地<sup>③</sup>に行きました。昨晚つりばりをしかけておいた辺りに、何かバタバタしているものが見えました<sup>⑤</sup>。

⑥ 「しめたぞ。」

じいさんはつぶやきながら、夢中<sup>⑦</sup>でかけつけました。

⑧ 「ほほう、これはすばらしい。」

じいさんは、思わず子どものように声を上げて喜びました。一羽<sup>⑨</sup>だけであつたが、生きているガンがうまく手に入ったので、じい<sup>⑩</sup>さんはうれしく思いました。

⑪ さかんにばたついたとみえて、辺り一面に羽が飛び散っていました。

⑫ ガンの群れは、これに危険を感じてえさ場を変えたらしく、付<sup>⑬</sup>近には一羽も見えませんでした。しかし、大造じいさんは、たか<sup>⑭</sup>が鳥のことだ、一晩たてば、またわすれてやって来るにちがいないと<sup>⑮</sup>考えて、昨日よりも、もっとたくさん<sup>⑯</sup>のつりばりをばらまいておきました。

⑰ そのよく日、昨日と同じ時こくに、大造じいさんは出かけていきました。

⑱ 秋の日が、美しくかがやいていました。

じいさんがぬま地にすがたを現すと、大きな羽音とともに、ガンの大群が飛び立ちました。じいさんは、「はてな。」と首をかしげました。

つりばりをしかけておいた辺りで、確かに、ガンがえをあさった形せきがあるのに、今日は一羽もはりにかかっていません。いっ



たい、<sup>⑱</sup>  
どうしたというのでしょうか。

気をつけて見ると、つりばりの糸が、みなびいんと引きのばさ  
れています。

ガンは、昨日の失敗にこりて、えをすぐには飲みこまないで、  
まず、くちばしの先にくわえて、ぐうとひっばってみてから、い  
じょうなしとみとめると、初めて飲みこんだものらしいのです。  
<sup>⑲</sup>これも、あの残雪が、仲間を指導してやったにちがいありません。  
<sup>⑳</sup>「うむ。」

大造じいさんは、思わず感たん<sup>㉑</sup>の声をもらしてしまいました。  
ガンとかカモとかいう鳥は、鳥類の中で、あまりりこうなほう  
ではないといわれていますが、どうしてなかなか、あの小さい頭  
の中に、たいしたちえを持っているものだなということを、今さ<sup>㉒</sup>  
らのように感じたのでありました。

## (2) 教材解釈

### ① 「昼近く」

- ・ ガンは早朝に餌を食べる。
- ・ 十分に餌を食べさせるために、時間をたっぷり置いて。
- ② 「むねをわくわくさせながら」
- ・ 「なんだかうまくいきそうな気がして」(前場面) という思

いがあるから

- ・ 「かねて考えておいた特別な方法」(前場面) だから
- ・ 大造じいさんの気持ちが語り手に分かるということは、大造  
じいさんの目と語り手の目が重なっているから

### ③ 「行きました」

- ・ 語り手は大造じいさんと共に

### ④ 「何かバタバタしているもの」

- ・ 「何か」……バタバタからおおよその見当はついているが、  
明確ではないから

- ・ 「バタバタ」……鳥のはばたく音

### ⑤ 「見えました」

- ・ 語り手にも大造じいさんにも

### ⑥ 「しめたぞ」

- ・ 物事が自分の思う通りになった時に喜んでいう語
- ・ つりばりにガンがかかったことを確信して喜んでいる言葉

### ⑦ 「夢中でかけつけました」

- ・ 「夢中」……つりばりにかかったガンをはやく見たいという  
思いの強さから
- ・ 「かけつける」……駆けて到着する。急いでやってくる。
- ・ 「かけつけました」……大造じいさんの目と重なっていた語

り手が、先回りをして大造じいさんを待ち受けている。

⑧「これはすばらしい」

- ・ 次行からの「生きているガンがうまく手に入ったので、じいさんはうれしく思いました」が、この言葉の説明になっている。

⑩「思わず子どものように声を上げて喜びました」

- ・ 「思わず」――無意識に、知らず知らず
- ・ 「子どものように」――比喻

- ・ 特別な方法がうまくいった。残雪に対して、してやったり。かりゅうどとしてのプライドが保てた。

⑩「生きているガン」

- ・ 残雪が来る前は、猟銃で撃ち殺していた。手に入れていたのは、死んだガン。

- ・ 二年後の作戦の布石

⑪「うまく手に入った」

- ・ つりばりを飲み込んだら逃れようがない。
- ・ 残雪としても救いようがない。

⑫「ばたついた」

- ・ ばたばたする、せわしなく大きな音をたてて動きまわる

⑬「これに危険を感じて」

- ・ 一羽のガンがつりばりを飲み込みばたついたこと

- ・ 「ガンの群れは」とあるが、その群れを率いる残雪が危険を感じ取ったのであろう。

⑭「たかが鳥のことだ」

- ・ 「たかが」――つまるところ、せいぜい、たかだか
- ・ 大造じいさんの残雪に対する、見くびり、見下げ、おごり、甘さ

⑮「またわすれてやってくる」

- ・ 大造じいさんが、特別の方法の続行を考えた根拠

⑯「昨日よりも、もっとたくさん」

- ・ 一羽のガンを手に入れたことで自信を持ち、さらに多くのガンを手に入れようとして、もっとたくさんをつりばりを用意した。

⑰「美しくかがやいて」

- ・ 情景描写と同時に大造じいさんの心象描写

- ・ 昨日の手応えの名残り、今日の成果への期待

⑱「はてな。」と首をかしげました

- ・ 「はて」――事の成り行きを怪しむ時、戸惑ったり思索したりする時などに発することば
- ・ その理由が、次の文の「ガンがえをあさった形せきがあるのに、今日は一羽もはりにかかっていません」と説明されている。

①9 「どうしたのでしょうか」

・ 語り手の思いだが、それは大造じいさんも同じ。

②0 「昨日の失敗」

・ 一羽のガンがつりばりを飲み込んで、捕えられたこと。

②1 「飲みこんだものらしい」

・ 「つりばりの糸が、みなびいんと引きのばされています」という状況からの、大造じいさんの推測。

②2 「これも」

・ 「これ」……「えをすぐには飲み込まないで、まず、くちばしの先にくわえて、ぐうとひっぱってみてから、いじょうなしとまとめると、初めて飲みこんだ」こと。

・ 「これも」……前には、「りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした」がある。

②3 「仲間を指導してやったにちがいありません」

・ 残雪の指導以外にはないと断定している。

②4 「ううむ。」

・ 別の言葉で言い替えると「やられた。」「すごいやつだ。」「なんてやつだ。」

②5 「思わず感たんの声」

・ 「感嘆」……感心してほめたたえること

・ 「感たんの声」……「ううむ。」(前行)

②6 「もらしてしまいました」

・ 本人の自覚がないまま自然に

②7 「今さらのように感じた」

・ 「今さら」……今新しく、今新たに

・ 「たいしたちえを持っている」ということを

(3) 本時の目標

大造じいさんは一羽のガンを手に入れただけに終わり、特別な方法を見破った残雪の知恵に感嘆し感じ入っていることを読み取ることができる。

(4) 発問

(a) 「昼近く」になって出かけて行ったのはなぜか。

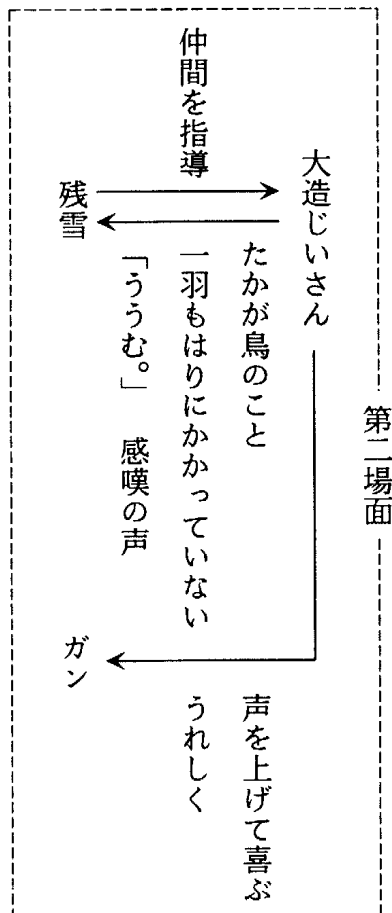
(b) なぜ「むねをわくわくさせながら」行ったのか。また、大造じいさんの気持ちがなぜ語り手に分かるのか。

(c) 大造じいさんは「行きました」とあるが、語り手はどこにいるか。

(d) 「何かバタバタしているもの」とは何か。また、「ガン」と表現しないで「何か」と表現しているのはなぜか。

(e) 「見えました」とあるが、語り手はどこにいるのか。

- (f) 「しめたぞ」から、大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。また、「しめたぞ」を別の言葉に言い替えるとどんな言葉になるか。
- (g) 「夢中でかけつけました」から、大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。
- (h) 「かけつけました」とあるが、語り手は今どこにいるか。
- (i) 「これはすばらしい」とあるが、これを説明している文はどれか。
- (j) 「思わず子どものように声をあげて喜びました」とあるがなぜか。
- (k) 「生きているガン」から分かることは何か。
- (l) 「うまく手に入った」を残雪から考えるとどうなるか。
- (m) 「これに危険を感じて」の「これ」とは何か。また、誰が危険を感じたのか。
- (n) 「たかが鳥のことだ」の「たかが」を別の言葉に言い替えてみよう。また、この言葉から、大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。
- (o) 大造じいさんが特別な方法が続けようとしたのは、どんな理由からか。
- (p) 「昨日よりも、もっとたくさん」つりばりを準備したことから、どんなことが分かるか。
- (q) 「秋の日」「美しくかがやいて」から、大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。



- (5) まとめの板書
- (r) 大造じいさんが「はてな。」と首をかしげたのは、どんなことからか。
- (s) 「どうしたというのでしょうか」とは、誰が思っているのか。
- (t) 「昨日の失敗」とはどんなことか。
- (u) 「飲みこんだものらしい」と「飲みこんだ」とを比べてみよう。
- (v) 「これも」の「これ」とはどういうことか。また、「これは」でなくて「これも」と表現されているのはなぜか。
- (w) 「ううむ。」を別の言葉で言い替えるとどうなるか。
- (x) 「感たん」とはどういう意味か。
- (y) 「もらしてしまいました」と「もらしました」とを比べてみよう。
- (z) 「今さらのように」を別の言葉で言い替えるとどうなるか。

(1) 教材文 《第三場面》

① そのよく年も、残雪は、大群を率いてやって来ました。そして、  
② 例によって、ぬま地のうちでも見通しのきく所をえさ場に選んで、  
えをあさるのです。

大造じいさんは、夏③のうちから心がけて、タニシを五俵ばかり  
④ 集めておきました。そして、それを、ガンの好み⑤のような場所にば  
らまいておきました。⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹

(2) 教材解釈

①「例によって」

- ・ いつもの通り、前と同じように、
- ・ 「例によって例の如し」……慣用句

②「見通しのきく所」

- ・ 仲間を守るため、油断なく気を配れる所
- ・ りょうじゅうが届く所まで、人間を寄せつけないために

③「夏のうちから心がけて」

- ・ ガンの来る（秋）前から次の作戦の準備
- ・ 「何としてでも」というかりゅうどとしての意地、プライド
- ・ 「心がけて」……常に心に留める、忘れずに思う、心に掛ける

④「タニシを五俵」

- ・ 「一俵」……米などの俵詰め一つ、米で四斗（一斗は一升の十倍）入る。

- ・ 大量のタニシを集めて準備

⑤「ガンの好みそうな場所」

- ・ かりゅうどだからあな場をよく知っている。

⑥「あんばい」

- ・ 物事の具合、様子、物事のほどあい、かげん

⑦「その夜行ってみると」

- ・ 残雪に気づかれないように……鳥は一般に夜は目が見えない

⑧「案の定」

- ・ 思った通り、予期した通り、はたして

⑨「うんとこさ」

- ・ たくさん

⑩「四、五日も続いた」

- ・ 三日までぐらいなら残雪も警戒

- ・ 四、五日もとなれば残雪も警戒を解くだろうという読みと畏
- ⑪「うまくいったので、会心のえみ」

- ・ 「会心のえみ」……自分の気持ち、考えと一致すること、満足すること

- ・ 読み通り、作戦通りに満足

⑫「夜の間に」

- ・ 「その夜行ってみると」と同じ意味

⑬「あかつきの光」 ⑭「すがすがしく」

- ・ 情景描写と大造じいさんの心象描写（作戦通りに進んでいるという思い）

⑮「あなたの空に黒く点々」

⑯「先頭に来るのが、残雪」

⑰

- 「群れは、ぐんぐんやってきました」

・ 遠近法

⑱「目にももの見せてくれるぞ」

- ・ 思い知らせる、ひどい目にあわせる、今までの借りを返す
- ・ この「」は、会話文ではない。「」の下に地の文が続いていることから、大造じいさんの心中での思い。

⑲「ほかがびりびりするほど引きしまる」

- ・ 成算ありと思いつつ、何度も煮え湯を飲まされている残雪への不安感が、大造じいさんをして緊張させている。

⑳「ところが、残雪は」

- ・ 今まで語り手の目が大造じいさんの目と重なって、残雪たちの群れを見ていたが、今度は語り手の目が残雪と重なって地上を見下ろしている。

・ 残雪側からの描写に転換

㉑「かれの本能は、そう感じたらしい」

- ・ 「様子の変わった所には、近づかぬがよいぞ」は、語り手が残雪の代弁をして、方向を変えた理由を読者に説明している。

㉒「ずっと西側のはしに着陸」

- ・ 残雪は、大造じいさんがタニシをまいておいたことも猟銃で狙っていたことも知らない。結果的に、大造じいさんの猟銃の射程距離から大きく離れた所に着陸して、難を逃れたことにな

る。

㉓「またしても」

- ・ 二度とあるまい、または二度あっては困る、と思うことが、現実には再び生ずるさまを表す語

㉔「してやられてしまいました」

・ 作戦の甘さ

ア 「昨日までなかった小さな小屋」

イ 「りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけません」の筈

㉕「と、うなっていました」

- ・ 普通は「とうなっていました」と読点がつかないが、つけてあることによって「うなっていました」を強調している。

(3) 本時の目標

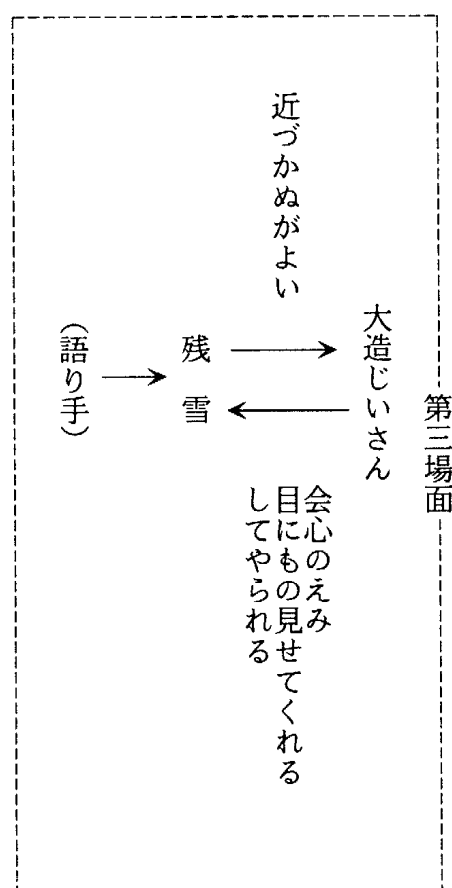
大造じいさんが目にもものみせられると意気込んだタニシ作戦も、残雪の油断のない本能の前にしてやられてしまったことを読み取ることができる。

(4) 発問

- (a) 「例によって」を別の言葉に言い替えてみよう。  
残雪が「見通しのきく所」を選ぶのはなぜか。
- (b) 「夏のうちから心がけて」いることから、どんなことが分かるか。
- (c) 「タニシを五俵」とあるが、どのくらいの量か。
- (d) 「あんばい」とは、どういう意味か。
- (e) 「その夜行ってみると」とあるが、夜になって行ったのはなぜか。
- (f) 「案の定」を別の言葉に言い替えてみよう。
- (g) 「うんとこさ」とは、どういう意味か。
- (h) タニシを四、五日も続けてまいたのは、どういう考えからか。
- (i) 「うまくいったので、会心のえみ」をもらしたとあるが、どんな気持ちが分かるか。
- (j) 「あかつきの光」「すがすがしく」は、大造じいさんのどんな気持ちを表しているか。
- (k) 「あなたの空に黒く点々」「先頭に来るのが残雪」「群れは、ぐんぐんやってきます」とあるが、このような表現方法を何と言うか。
- (l) 「目にも物を見せてくれるぞ」を別の言葉で言い替えてみよう。
- (m) 「ほおがびりびりするほど引きしまる」というのは、どんな様子か。また、なぜか。
- (n) 「かれの本能は、そう感じたらしい」とは、誰が言っているのか。また、なぜか。

- (p) 「ずっと西側のはしに着陸」したことから、どんなことが分かるか。
- (q) 「してやられてしまいました」とあるが、その原因は何か。
- (r) 「と、うなっていました」と「とうなっていました」を比べてみよう。

#### (5) まとめの板書



- (1) 教材文 《第四場面》
- ① 今年もまた、ぼつぼつ、例のぬま地にガンの来る季節になりました。

大造じいさんは、生きたドジョウを入れたどんぶりを持って、鳥



小屋の方に行きました。じいさんが小屋に入ると、一羽のガンが、羽をばたかせながら、じいさんに飛び付いてきました。

このガンは、二年前、じいさんがつりばりの計略で生けどったものだったのです。今では、すっかりじいさんになつていました。ときどき、鳥小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュー、ヒュー、ヒューと口笛をふけば、どこにいてもじいさんの所に帰ってきて、そのかた先に止まるほどに慣れていました。

大造じいさんは、ガンがどんぶりからえを食べているのを、じっと見つめながら、

「今年はひとつ、これを使ってみるかな。」  
と、独り言を言いました。

じいさんは、長年の経験で、ガンは、いちばん最初に飛び立ったものの後について飛ぶ、ということを知っていたので、このガンを手に入れたときから、ひとつ、これをおとりに使って、残雪の仲間をとらえてやろうと、考えていたのでした。

さて、いよいよ残雪の一群が今年もやって来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけていきました。

ガンたちは、昨年じいさんが小屋がけた所から、たまのどくきよりの三倍もはなれている地点を、えさ場になっているようでした。

そこは、夏の出水で大きな水たまりができて、ガンのえが十分にあらしかったのです。

「うまいくぞ。」

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりとした。

その夜のうちに、飼い慣らしたガンを例のえさ場に放ち、昨年建てた小屋の中にもぐりこんで、ガンの群れを待つことにしました。

「さあ、いよいよ戦とう開始だ。」

東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。

残雪は、いつものように群れの先頭に立って、美しい朝の空を、真一文字に横切ってやって来ました。

やがて、えさ場に行くと、グワア、グワアというやかましい声で鳴き始めました。大造じいさんのむねは、わくわくしてきました。しばらく目をつぶって、心の落ち着くのを待ちました。そして、冷え冷えするじゅう身をぎゅっとにぎりしめました。

じいさんは目を開きました。

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」

くちびるを二、三回静かにぬらしました。そして、あのおとりを飛び立たせるために口笛をふこうと、くちびるをとんがらせました。

と、そのとき、ものすごい羽音とともに、ガンの群れがいちどにバタバタと飛び立ちました。

「どうしたことだ。」

じいさんは、小屋の外にはい出してみました。

ガンの群れを目がけて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。

「ハヤブサだ。」

ガンの群れは、残雪に導かれて、実にすばやい動作で、ハヤブサの目をくらしながら飛び去っていきます。

## (2) 教材解釈

### ① 「今年」

- ・ 一年目は「特別な方法」(ウナギつりばり作戦)、二年目は「タニシ作戦」、「今年」は「おとり作戦」で、三年目になる。

### ② 「一羽のガン」

- ・ 次の文に、このガンの説明がある。「このガンは、二年前、じいさんがつりばりの計略で生けどったものだったのです。」
- ③ 「飛び付いて」 ④ 「なついて」 ⑥ 「慣れて」
- ・ 大造じいさんにすっかり馴れ親しんでいる様子が、言葉を変えて繰り返し表現されている。

### ⑤ 「口笛」

- ・ おとり作戦のための調教

⑦ 「これを使ってみるかな」 ⑧ 「いちばん最初に飛び立ったものの後について飛ぶ」

- ・ おとり作戦の内容

⑨ 「このガンを手に入れたときから」

- ・ このガンは一年目に手に入れたが、おとりにするためには大造じいさんになつかせ調教する必要がある。それで、二年目には使わず三年目の今年に使うことにした。

### ⑩ 「残雪の仲間」

- ・ 残雪をとらえることはまず不可能である。そこで、仲間のガンをとらえることにしそれが残雪にひとあわふかせることになる。

### ⑪ 「残雪の一群」

- ・ 一場面では「残雪は、ガンの群れを率いて」、二場面では「残雪は、大群を率いて」とあり、残雪が群れを率いてくることは同じだが、表現の仕方に工夫がある。

⑫ 「たまのとどくきよりの三倍もはなれている地点」

- ・ 昨年、昨日までなかった小さな小屋をまとめ、急角度に方向を変えたが、今年は始めからその地点を避けている。それも「たまのとどくきよりの三倍もはなれている地点」であり、りょ

うじゅうのとどく所まで決して人間を寄せつけないという残雪の油断のなさを示している。

⑬「出水」

- ・ 大水が出ること、洪水、でみず

⑭「うまくいくぞ」 ⑮「青くすんだ空」 ⑯「にっこり」

- ・ 我に勝算ありという大造じいさんの自信の表れ。
- ・ 「青くすんだ空」は大造じいさんの心も反映

⑰「戦とう開始」

- ・ 「戦とう」……たたかい、いくさ
- ・ 今度こそ決着をつけるという強い思いを口に出し、気をふるい立たせている。

⑱「東の空が真っ赤」

- ・ 「真っ赤」は大造じいさんの心も反映

⑲「真一文字」

- ・ 「一」の字のようにまっすぐなこと。また、わきめもふらずつき進むさま。

⑳「わくわく」

- ・ おとり作戦成功への期待と確信。

㉑「心の落ち着くのを待ちました」

- ・ いつもあと一歩でしてやられているから、慎重に、確実に、

疎漏のないようにと。

㉒「ぎゅっとにぎりしめました」

- ・ 大造じいさんの心の高まり、意欲満々。

㉓「残雪め」 ㉔「ひとあわふかせてやるぞ」

- ・ 「残雪め」の「め」……見下げ、ののしり
- ・ 「ひとあわふかせる」(一泡吹かせる)……相手の不意をついて驚きあわてさせる。

- ・ 残雪を敵対視、ライバル視し、残雪を驚かせあわてさせようとしている。

㉕「あのおとりを飛び立たせる」

- ・ 「いちばん最初に飛び立ったものの後について飛ぶ」というガンの習性を利用。

㉖「何か一直線に落ちてきました」

- ・ 「何か」……その瞬間には何か分からない。
- ・ 「落ちて」……飛んでいることも分からず、落ちてくるように見えた。

㉗「残雪に導かれて」 ㉘「実にすばやい動作で」 ㉙「ハヤブサ

- ・ の目をくらしながら飛び去って」
- ・ 頭領としての見事な采配ぶり。

(3) 本時の目標

おとり作戦で残雪にひとあわふかせてやろうとしていた大造じいさんは、作戦開始寸前にハヤブサに邪魔をされてしまったことを読み取ることができる。

(4) 発問

- (a) 「今年」とあるが、この物語では何年目になるか。
- (b) 「一羽のガン」の説明をしている文はどれか。
- (c) 一羽のガンと大造じいさんとの関係を表す言葉はどれか。また、どんな効果を上げているか。
- (d) 「口笛」は何のためか。
- (e) 次の作戦の内容を予想させる言葉はどれか。
- (f) 一羽のガンを手に入れた次の年に使わなかったのはなぜか。
- (g) 残雪ではなく残雪の「仲間」をとらえようと考えたのはなぜか。
- (h) 「残雪の一群」がやってきたとあるが、一年目や二年目はどのように表現されているか。
- (i) たまのとどく距離の三倍も離れている地点をえさ場にしたことから分かることは何か。
- (j) 「うまくいくぞ」「青くすんだ空」「にっこり」から分かること

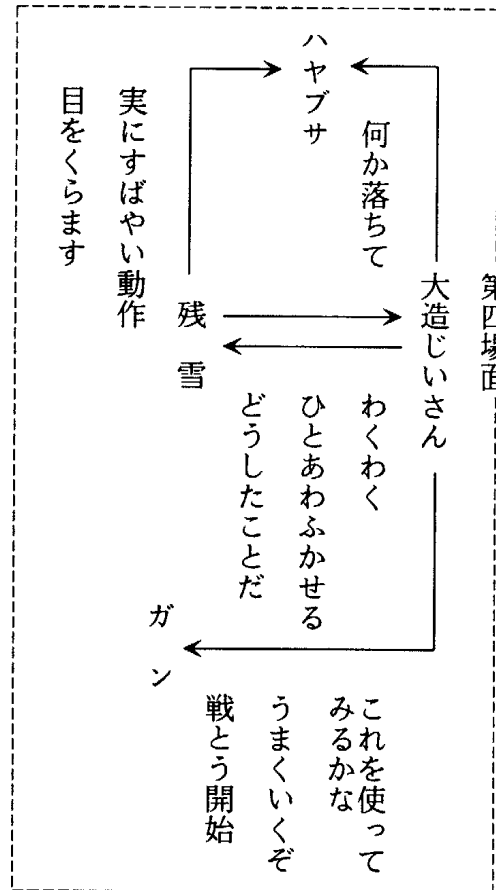
は何か。

- (k) 「戦とう開始」という言葉からどんな思いが伝わってくるか。
- (l) 「東の空が真っ赤」から大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。

- (m) 「真一文字」とはどんな意味か。
- (n) 大造じいさんが「わくわく」しているのはなぜか。
- (o) 大造じいさんが「心の落ち着くの待ちました」とあるがなぜか。
- (p) 大造じいさんがじゅう身を「ぎゅっとにぎりしめました」とあるが、ここから分かることは何か。
- (q) 「残雪め」と「残雪」とを比べてみよう。
- (r) 「ひとあわふかせてやる」とはどういう意味か。
- (s) 「残雪め」「ひとあわふかせてやる」から大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。
- (t) 「あのおとりを飛び立たせる」のは何のためか。
- (u) 「何か一直線に落ちてきました」とあるが、なぜこのような表現になっているのか。
- (v) 「残雪に導かれて」「実にすばい動作で」「ハヤブサの目をくらましながら飛び去って」から、残雪の何が分かるか。

(5) まとめの板書

第四場面



(1) 教材文 《第五場面》

- ① あっ。
- ② 羽、飛びおくれたのがいます。
- ③ 大造じいさんのおとりのガンです。長い間飼いならされていたので、野鳥としての本能がにぶっていたのです。
- ④ ハヤブサは、その一羽を見のがしませんでした。
- ⑤ じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと口笛をふきました。
- ⑥ こんな命がけの場合でも、飼い主のよび声を聞き分けたとみえて、ガンは、こっちに方向を変えました。
- ⑦ ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりました。

- ⑧ ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。ガンの体はななめにかたむきました。
- ⑨ もう一けりと、ハヤブサがこうげきのしせいをとったとき、さつと、⑩ 大きなけがが空を横切りました。
- ⑪ 残雪です。
- ⑫ 大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。が、なんと⑬ 思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。
- ⑭ 残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。ただ、救わねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。
- ⑮ いきなり、敵にぶつかっていきました。そして、あの大きな羽で、⑯ 力いっぱい相手をなぐりつけました。
- ⑰ 不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。が、ハヤブサも、さるものです。
- ⑱ さっと体勢を整えると、残雪のむな元に飛びこみました。
- ⑲ 羽が、白い花弁のように、すんだ空に飛び散りました。
- そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。

②⑩ 大造じいさんはかけつけました。

二羽の鳥は、なおも地上ではげしく戦っていました。②⑪が、ハヤブサは、人間のすがたをみとめると、急に戦いをやめて、よろめきながら飛び去っていきました。②⑫

残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。しかし、第二のおそろしい敵が近づいたのを感じると、残りの力をふりしぼって、ぐっと長い首を持ち上げました。そして、じいさんを正面からにらみつけました。②⑮

②⑯ それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました。

大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじたばたさわぎま②⑰ せんでした。それは、最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげ②⑱ んをきず付けまいと努力しているようでもありました。

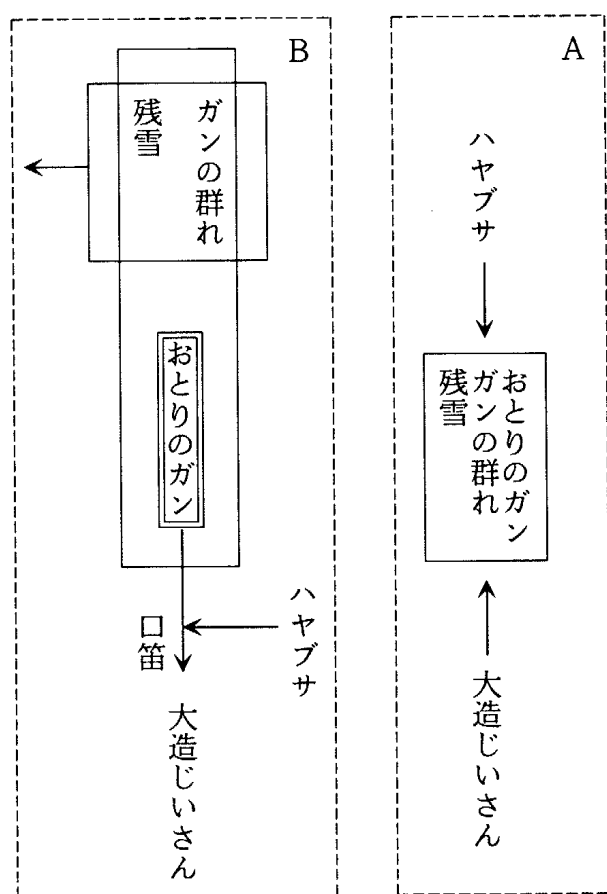
大造じいさんは、強く心を打たれて、③⑩ ただの鳥に対しているよう③⑪ な気がしませんでした。

## (2) 教材解釈

① 「あっ。」

② 「二羽、飛びおくれたのがいます。」

③ 「大造じいさんのおとりのガンです。」



④ 「ハヤブサは、その一羽を見のがしませんでした。」

⑤ 「じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと口笛をふきました。」

⑦ 「ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりました。」

⑧ 「ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。」

⑨ 「ガンの体はななめにかたむきました。」

これらの文は短文で、たたみこむように表現されている。急な展開、スピード感、臨場感を表すためである。

⑥ 「こっちに方向を変えました」

ガンの群れ、おとりのガン、ハヤブサ、大造じいさんを図式

⑩「大きなかげ」 ⑪「残雪です」

- ・ 倒置的な表現によって「残雪」を強調。

⑫「なんと思ったか」

- ・ 語り手には、大造じいさんの様子は分かるが気持ちは分からない。

- ・ おとりのガンを救ってくれた。

- ・ 予定した作戦ではない。

- ・ 漁夫の利を得るようなまねはしたくない。

- ・ 卑怯なまねはしたくない。

⑬「残雪の目には、人間もハヤブサもありません」

- ・ 語り手が残雪の目と重なって、残雪の側から読者に理由を説明している。

⑭「救わねばならぬ」

- ・ 使命感の強さ、頭領としてのプライド。

⑮「いきなり、敵にぶつかって」 ⑯「力いっぱい相手をなぐりつけました」

- ・ 残雪（ガン）の武器は、大きな体でぶつかるか、大きな羽でなぐりつけるしかない。

⑰「不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよるめきました。が、ハヤブサも、さるものです」

- ・ 「いきなり、敵にぶつかって」の文から、「そのまま、ハヤブサと残雪は」の文まで、一文が短い。戦いのスピード感、臨場感を表すための表現である。

- ・ 「不意」――突然、だしぬけ

- ・ 「さすがの」――そうは言っても

- ・ 「さるもの」――ぬけめのない者、したたかな者

⑱「ぱっ ぱっ」

- ・ 句読点がないことから、羽の飛び散る速さを表している。

⑲「白い花弁のように」

- ・ 比喻表現

⑳「大造じいさんはかけつけました」

- ・ 語り手が先回りをして待ち受けている。

㉑「よろめきながら」

- ・ ハヤブサも残雪の大きな体と羽で、かなりのダメージを受けている。

㉒「くれない」

- ・ 紅色

- ・ 生々しさを避けて「血」とせず、「くれない」と表現。しかし、残雪の方がダメージは大きい。

- ・ 「白い花弁」「青くすんだ空」「東の空が真っ赤」など色どりを

のある世界。

②③「第二のおそろしい敵」

- ・ 第一のおそろしい敵はハヤブサ、第二のおそろしい敵は人間である大造じいさん。

②④「残りの力をふりしぼって」

- ・ 「ふりしぼる」……しぼるようにして全部出す、努力して出せるだけ出す
- ・ ハヤブサとの戦いで大きなダメージを受け、半死半生の状態なのに。

②⑤「正面からにらみつけました」

- ・ 「にらみつける」……はげしくにらむ、つよくにらむ
- ・ 「残りの力をふりしぼって」と共に、残雪の精神力の強さを表している。

②⑥「それは、鳥とはいえ、いかにも頭領らしい、堂々たる態度のようでありました」

- ・ 大造じいさんや語り手の思い……「いかにも頭領らしい、堂々たる態度」

- ・ 「残りの力をふりしぼって」「正面からにらみつけました」の説明

②⑦「じたばたさわぎません」

- ・ その理由が次の文で説明

②⑧「最期の時を感じて、せめて頭領としてのいげんをきず付けまいと努力しているようでもありました」

- ・ 「最期」……命の終わる時期、死ぬ時、死にぎわ
- ・ 「最後」……物事のいちばん終わり、最終、終末
- ・ 「せめて」……しいて、むりに、たって、つとめて
- ・ 「いげん」（威厳）……近づきたいほど堂々として立派であること
- ・ 「きず付く」……人の気持ち、名声、信用などがそこなわれる
- ・ 「努力しているようでもありました」は、残雪の本当の気持ちには分からないがその様子から大造じいさんや語り手が推測している。

②⑨「強く心を打たれて」

- ・ 語り手の目が大造じいさんの目と重なっていることにより、大造じいさんの気持ちが分かる。

③⑩「ただの鳥に対してのような気がしません」

- ・ 特別な方法（ウナギつりばり作戦）では、「たかが鳥のことだ」から「思わず感たんの声をもらしてしまいました」、タニシ作戦では、「目にも見せてくれるぞ」から『ううん。』と、



うなっていました』、おとり作戦では、「ひとあわふかせてやるぞ」から「ただの鳥に対してのような気がしませんでした」と残雪に対する認識の度合いが高まってきていたが、それが最高潮に達したことになる。それが、次の場面の伏線となり、残雪を生かし自由にさせることになる。

(3) 本時の目標

ハヤブサと戦い、傷ついていても頭領らしい堂々たる態度に、大造じいさんは強く心を打たれたことを読み取ることができる。

(4) 発問

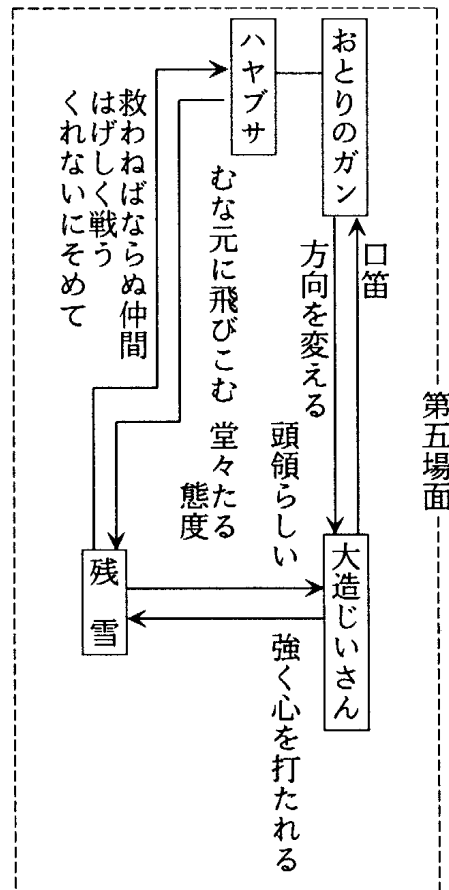
- (a) 短い文がならんでいるのは、どんな効果を上げるためか。
- (b) 「こっちに方向を変え」のところを、ハヤブサ、おとりのガン、ガンの群れ、大造じいさんを入れて図で書こう。
- (d) 「さっと、大きなかげが空を横切りました。残雪です。」と「さっと、残雪の大きなかげが空を横切りました。」と比べてみよう。
- (e) 「なんと思ったか」と言っているのは誰か。
- (f) 「なんと思ったか」とあるが、大造じいさんは何を思ったのか。
- (g) 「残雪の目には、人間もハヤブサありませんでした」とある

が、語り手がなぜ残雪の立場に立って言っているのか。

- (h) 「救わねばならぬ」から、残雪のどんなことが分かるか。
- (i) 残雪の戦いの武器は何か。
- (j) 「いきなり、敵にぶつかって」の文から、「そのまま、ハヤブサと残雪は」の文まで、一文が短いなぜか。
- (k) 「不意」「さすがの」「さるもの」はそれぞれどんな意味か。
- (l) 「ぱっ ぱっ」と「ぱっ。ぱっ。」を比べてみよう。
- (m) 語り手が先回りをして待ち受ける「かけつけました」は、前のどの場面にあったか。
- (n) ハヤブサの「よろめきながら」から分かることは何か。
- (o) 「くれない」とはどんな色か。また、そのほかにどんな色が書かれているか。
- (p) 「第二のおそろしい敵」とは誰で、誰から見ているのか。
- (q) 「残りの力をふりしぼって」「正面からにらみつけ」「じたばたさわぎません」という残雪から分かることは何か。
- (s) 「最期」と「最後」はどう違うか。
- (t) 「いげん」とはどういう意味か。
- (u) 「最期の時」「頭領としてのいげんをきず付けまいと努力しているよう」と感じているのは誰か。
- (v) 「ただの鳥に対してのような気がしません」という大造じい

さんの気持ちから分かることは何か。

(5) まとめの板書



(1) 教材文 《第六場面》

残雪は、大造じいさんのおりの中で、ひと冬をこしました。春に  
なると、そのむねのきずも治り、体力も元のようにになりました。

ある晴れた春の朝でした。

じいさんは、おりのふたをいっばいに開けてやりました。

残雪は、あの長い首をかたむけて、とつ然に広がった世界におど

ろいたようでありました。が、  
パシッ。

快い羽音一番、一直線に空へ飛び上がりました。  
らんまんとさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清  
らかに、はらはらと散りました。

「おうい、ガンの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、  
ひきょうなやり方でやつけたかあないぞ。なあ、おい。今年の  
冬も、仲間を連れてぬま地にやって来いよ。そうして、おれたち  
は、また堂々と戦おうじゃないか。」

大造じいさんは、花の下に立って、こう大きな声でよびかけました。  
そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした  
顔つきで見守っていました。

いつまでも、いつまでも、見守っていました。

(2) 教材解釈

①「おりの中で、ひと冬をこしました」

・ 前場面で残雪は「最期の時を感じて」とあるが、残雪の姿に  
強く心を打たれた大造じいさんは、殺すようなことはしなかつ  
た。

②「むねのきずも治り、体力も元のように」

・ ハヤブサとの戦いでの胸の傷は、おそらく大造じいさんが治  
療を施したのであろうし、餌も適切に与えたのであろう。

③「広がった世界」

- ・ 狭いおりの中から広く自由な世界、頭領として采配をふるう世界

④「おどろいたよう」

- ・ おそろしい敵から逃がしてもらえとは全く思っていなかったから

⑤「バシッ。」

- ・ 句点「。」があることにより、大きな羽の力強さを表している。

⑥「一直線」

- ・ 自由への喜び、仲間のところへ帰れる喜び

⑦「らんまん」

- ・ 花の咲き乱れているさま

⑧「雪のように清らかに、はらはらと散りました」

- ・ 情景描写だが、敵同士であった大造じいさんと残雪の関係が氷解したことを象徴している。

⑨「ガンの英ゆう」

- ・ 「英雄」― 知力や才能、または胆力、武勇などに特にすぐれていること。また、その人。

- ・ 最大級のほめ言葉

⑩「えらぶつ」

- ・ すぐれた人、腕前のある人

⑪「ひきょうなやり方でやつけたかあないぞ」

- ・ 大造じいさんの人柄、かりゅうど魂、プライド。

⑫「堂々と戦おう」

- ・ 「特別な方法」(ウナギつりばり作戦)、タニシ作戦、おとり作戦に替わる新しい作戦で戦おうとしている。

⑬「北へ北へ」

- ・ 残雪の故郷へ、仲間の待つ所へ

- ・ 遠近法

⑭「晴れ晴れとした顔つき」

- ・ 「晴れ晴れ」― 心にくもりがなくさっぱりしているさま。

- ・ テレビ画面でいえば、ズーム・イン

⑮「いつまでも、いつまでも、見守っていました」

- ・ テレビ画面でいえば、ズーム・アウト

(3) 本時の目標

残雪をおりから解き放ち、残雪に「ガンの英ゆうよ」「また堂々と戦おう」と呼びかける大造じいさんの心意気を読み取ることができる。

(4) 発問

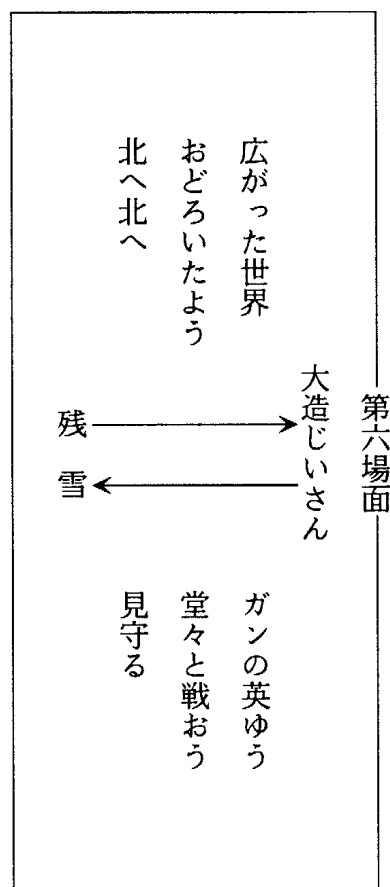
- (a) 大造じいさんが残雪を殺さなかったのはなぜか。
- (b) 大造じいさんは残雪にどのような世話をしたのか。
- (c) 「広がった世界」を別の言葉で言い替えるようになるか。
- (e) 残雪は「おどろいたよう」とあるがなぜか。
- (f) 「バシッ」と「バシッ」ではどう違うか。
- (g) 「一直線」から残雪のどんな気持ちが分かるか。
- (h) 「らんまん」とはどんな意味か。
- (i) 「雪のように清らかに、はらはらと散りました」から大造じいさんのどんな気持ちが分かるか。
- (j) 「英ゆう」とはどんな意味か。
- (k) 「ガンの英ゆう」という言い方は、大造じいさんのどんな気持ちを表すか。
- (l) 「えらぶつ」とはどういう意味か。
- (m) 大造じいさんが「ひきょうなやり方でやつけたかあないぞ」と言うのは、何がそう言わせているのか。
- (n) 大造じいさんは「堂々と戦おう」と言っているが、どんな作戦を考えているか想像してみよう。
- (o) 残雪はどこへ帰ろうとしているのか。
- (p) 「北へ北へ」とあるが、このような表現方法を何と言ったか。

(q) 「晴れ晴れ」とはどういう意味か。

(r) 「晴れ晴れとした顔つき」は、テレビカメラでどのような撮り方をした時に映し出されるか。

(s) 「いつまでも、いつまでも、見守っていました」は、テレビカメラでどのような撮り方をした時に映し出されるか。

(5) まとめの板書



三 授業記録

私が担当した授業は、学習指導計画の第二次でプロローグから第六場面までの七時間である。前述の授業構想の中に発問を記述しているが、わたしの発問から授業が始まるのではない。まず、子供たちの読み取りを優先して発表させ、読み取れていないところやもう

少し深めて読んでもほしい時、それに読み方を教えるときのみ発問をするのである。前述の発問はそのためのものである。従って、私の授業には課題がない。私が先に枠を与えたり課題を提示したりしないで、子供が自分で読み取ったことを自分から話すようにした授業スタイルである。その授業を紹介する。場面は最後の第六場面である。

・ 第六場面の一斉音読

・ 一人読み……八分間

ア 自分のノートに、どの言葉からどんなことを読み取ったかを書く。

イ 読み取る内容は、登場人物の様子や気持ちや表現の仕方など。

・ 話し合い

T 立ち止まり①は、「はらはらと散りました。」までにします。

立ち止まり②は、最後の「見守っていました。」までです。それでは、どうぞ。

(子供たちの発言が場面のあちこちに分散しないように、場面を区切って話し合いをするのが「立ち止まり」である。物語は時間の順序に書かれているので、この方法で読むことを第

一時で説明をしている。)

C 「おりのふたをいっぱいに開けてやりました」と書いてあるが、「おりのふたを開けて」でもよいのに、「いっぱい」と書いてあるのは、残雪に元気に飛んでほしいからです。

C 大造じいさんは、「大きな羽を広げて元気に空へ飛んで行きなさい。」と残雪に言っているように、「いっぱい」開けたと思います。

T いつも行動の裏には必ず気持ちがあると書いていますね。今の二人はその両方をきちんと押さえて読んでいますね。いい読み方ですよ。

C その「おりのふた」の前の「むねのきずも治り、体力も元のようにになりました」というところで、大造じいさんがめんどろをみたと思います。

C 動物は舌でなめてきずをなおすと聞いたことがあるけど、ガンの場合は無理だと思います。

C でも、ガンは首が長いからできると思います。

C 私は、大造じいさんが、薬をつけてやったと思います。前の場面で「大造じいさんが手をのばしても、残雪は、もうじきたさわざまませんでした。」とあるから、薬をつけてやることできたと思います。

C 薬だけではなくて、「体力も元のようにになりました。」と書いてあるので、食べ物もやったとおもいます。タニシやどじょうなどです。

T ガンが舌でなめてきずをなおすかどうかは、わたしにもわかりません。しかし、おりの中に残雪を飼っていたのだから、皆さんが言ったような世話をいろいろしたのでしょね。

C 「とつ然に広がった世界におどろいたようでありました」と書いてあるのは、語り手の目が残雪と重なっているからこのことが言えると思います。

T そうですね。残雪の心が分かるというのは、重なっているからですね。

C 「おどろいたよう」から、残雪はうれしい気持ちになったし、大造じいさんは残雪を助けたといういい気持ちだったと思います。

C 「とつ然に広がった世界」から、残雪は始めは本当にあの人間が助けてくれるのかと疑ったと思います。

T なぜ疑ったと思ったのですか。

C それは、前の場面に「最期の時を感じて」と書いてあるからです。

T 「とつ然に広がった世界」というのは、別の言葉で言うところ

ういう世界ですか。いろいろな言い方ができるよ。

C 辺り一面に広がった美しい世界です。

C 自由な世界です。

C なつかしい世界です。

C 思いっきり飛び出せる世界です。

C 思い出の世界です。

T いいですね。また頭領として采配をふるうことのできる世界もいいですね。

C 「バシッ」というところは、擬音語が使っています。

T 擬音語はその通りですが、これに(句点)こだわってほしいですね。

C 短く強く言っています。

T まる(。 )があるのとないのでは、どう違いますか。

C ハヤブサとの戦いのときは、「ぱっ ぱっ」ではまるがついていなかったで、羽が速く散った感じと読み取っていました。ここはまるがあるので、反対で強く思いっきり飛び立っていったと思います。

T その通りですね。力強さがまるに表されていますね。

C 「一直線」という言葉から、このときの残雪は快い気持ちだったと思います。

T 「快い羽音一番」「一直線」の裏に、残雪の気持ちをうかがうことができるということですね。

C 「雪のように清らかに」から読み取ったんですが、「清らかに」を辞書で引いたら「濁りのないこと」と出ました。「雪のようにきれいに」でもおかしくないのに、「清らかに」と書いてあるので、清らかに散っていることを強調していると思います。それで、大造じいさんはさわやかな気持ちで見送れることが読み取れます。

C 辞書で調べたら、「清らか」は「すがすがしい」と書いてありました。大造じいさんは、前はたかが鳥としか見ていなかったけど、今は残雪によかったといういい気持ちを持っていると思います。

C 「らんまん」を辞書で引いたら、「美しく咲き乱れるさま」と書いてありました。こんなに美しく咲き乱れている春の朝に残雪を飛び立たせたから、大造じいさんはとてもさわやかですがすがしい快い気持ちだったと思います。

T その読み方でいいですが、前に大造じいさんは残雪のことを「いまいましく」思い、「目にも物を見せてくれるぞ」と思い、「ひとあわふかせてやるぞ」と思っていたね。残雪を敵とみなしていたが、さわやかな気持ちになり胸の中にあったいまいま

しさがとけてしまった、とけて流れてしまったということですね。氷のような物がとけて流れることを氷解と言います。この氷解というのは、今発表した子たちと同じ意味ですよ。

C 「飛び上がりました」は「飛び立ちました」でもよいのに、「飛び上がり」となっているのは、残雪がうれしそうに飛んで行ったように見えたからだと思います。

T それは「一直線」とも絡んできますね。

C 「らんまん」とさいたスモモの花が、その羽にふれて、雪のように清らかに、はらはらと散りました」と語り手は情景描写のことを言っているので、語り手はこのとき情景を見ていたと思います。

C 前へ戻りますが、「ある晴れた春の朝でした」からうれしさ、楽しさが分かります。

T 誰がですか。

C 大造じいさんです。

T 情景からも言えますが、残雪を逃がしてやるという大造じいさんの気持ちからも言えますね。

C 「その羽にふれて」の「ふれて」は、「さわって」よりもなにげなくてやさしい感じがします。「はらはら」も「がさつ」という強い言い方と比べると弱々しく感じます。

T 立ち止まり②へ行きましょう。どうぞ。

C 「ガンの英ゆうよ」と「ひきょうなやり方でやつけたかあ  
ないぞ」から、英ゆうだからひきょうなやり方でやっては申し  
訳ないという気持ちと、残雪を人間のように扱って正々堂々と  
戦いたいという気持ちがあると思います。

C 前は「あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ」とにくらしく  
思っていたが、気持ちが変って今は残雪と正々堂々と戦いたい  
と思っています。

C 「ひきょうなやり方でやつけたかあないぞ」というところ  
で、今までもひきょうなやり方は考えていないけど、大造じい  
さんは残雪の姿に気持ちが変って、自分を反省してこれからも  
正々堂々と戦いたいと思っています。

T 大造じいさんの言うひきょうなやり方とは、どういうやり方  
ですか。

C 大造じいさんはやっていないけど、やりかけたときがありま  
す。それは残雪がハヤブサと戦っているときです。

T それはどういう文ですか。

C 前の場面の「大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、  
残雪をねらいました。」という文です。

T それがなぜ「ひきょうなやり方」なのですか。

C 大造じいさんと残雪との戦いではなくて、残雪がハヤブサと  
戦っているときをねらったからです。

T そうですね。残雪に余裕のないときをねらうというのはずる  
いし、ひきょうですね。だから、大造じいさんはじゅうを下ろ  
してしまったのですね。そういうやり方ではなくて、残雪と真っ  
正面から戦おうということで「堂々と」言っているのですね。

C 「英ゆう」というところから、前は「たかが鳥」と見下して  
いたが今は立派な鳥だと認めているところが変ったと思います。

T 「英ゆう」と言ったのは最大のほめ言葉ですよ。

C 「おれたち」の「たち」も、大造じいさんは残雪を同等に、  
人間と等しく見ていると思います。

C 「たかが鳥」と残雪のことを悪く言っていたけど、今は人間  
のように見ていて、ライバル、親友のように見えていると思いま  
す。

C 「晴れ晴れとした顔つき」のところから、自分のせいで残雪  
が最期の時を感じて死にそうになっていたけど、体力がもどっ  
て元気になったので、また堂々と戦えるから「晴れ晴れとした  
顔つき」をしているのだと思います。

T 考えてみると残雪をずっととらえていたら、ガンをいくらで  
も手に入れることができるわけでしょう。いつも残雪にしてや



られているのだから。だけど、残雪を放してやった。「ひきょうなやり方でやつけたかあない」と言って。それは、大造じいさんのかりゅうどとしてのプライドでしょうね。

C 「晴れ晴れ」というところからですが、残雪がけがをしているときよりも元気になって飛び立って行ったから、大造じいさんは安心してすかつとした気持ちになっているから「晴れ晴れ」としているのだと思います。

C 「いつまでも、いつまでも」と繰り返してあるのは、残雪をじっと見ていたからだと思います。

C 「いつまでも、いつまでも」とてん(読点)が二つあることから強調していることが分かります。

C 「見守っていました」というのも二つあって繰り返してあるから、これもプロミネンスになっているのだと思います。

C 見守っていたのは大造じいさんだけではなくて、語り手もそうだと思います。

T 大造じいさんの「晴れ晴れとした顔つき」を語り手は、どこから見ているのですか。

近くから？ 遠くから？ テレビのカメラで大造じいさんの顔つきを撮るとすると近くからですね。テレビのカメラが近づいて大きく映すのをズーム・インと言います。クローズ・アップ

プとも言うね。最後の文の「いつまでも、いつまでも、見守っていました」というのは、語り手が遠くから大造じいさんを見ている。テレビのカメラで言えば、遠くから全体を映している。これをズーム・アウトと言います・ズーム・インとズーム・アウトの両方で映しているから、「見守っていました」が二つ繰り返してあるのです。

C 「北へ北へ」というところから、残雪は仲間のいるところを目指して、奥へ奥へと飛んでいくのだと思います。

C この書き方は、前にタニシ作戦のとき残雪たちが近づいて来るときに習った遠近法で書かれていると思います。前のときは遠くから近づいて来たけど、ここでは近くから遠くへとなっています。

T その通りですね。ところで、大造じいさんは、この次、どんな方法を考えるのでしょうか。それでは、まとめに入りますよ。

・まとめ

黒板に、大造じいさんと残雪の関係図がT2の先生によって書かれている。子供たちは各自のノートにその図を書き、キーワードを書き込むのである。T3の先生の指名に代表の一人が黒板に書き込む。それを全員で検討し、各自のまとめに付加・修正を加えるので

ある。(この授業のまとめは、第六場面のまとめの板書参照)

#### 四 読み取りの視点

「読み取りの視点」というネーミングをしてくださったのはT2の先生であり、その視点が出てくる度に書き込む表を作成していただくのも同先生である。子供たちはその視点が出てくる度に表に書き込んで、その表を参考にして読み取りをしていたのである。その視点が「読み方の指導」の内容である。

その視点というのはあらかじめ決めておいたものではなく、「大造じいさんとガン」という教材文を読み進める中で指導したものである。結果的には二十の視点を指導したことになる。

その視点を例をあげて説明する。

#### ① 語り手

この教材文のプロローグに次のような文がある。

知り合いのかりゅうどにさそわれて、わたしは、イノシシがりに出かけました。

わたしは、その折の話を土台として、この物語を書いてみました。

この場合の「わたし」は作者、椋鳩十であるが、本文を語っているのも作者であると子供たちが錯覚しないようにということを取り上げたのである。

- ・ どの物語でも話を語っているのは作者ではない。作者は物語の中に「語り手」を置いて話を語らせているのである。

- ・ 語り手は物語の中に登場する場合と登場しないで語るだけの場合とがある。物語の中に登場する場合は二通りある。一つは話を語るだけの「語り手」で、例えば「ごんぎつね」の冒頭で「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。」と語る語り手である。もう一つは、主人公が話を語る場合で「わたし」の目から描かれている物語である。「大造じいさんとガン」では、物語の中に登場しないで語るだけの「語り手」である。

- ・ 語り手が登場人物について語る場合、外の目と内の目がある。外の目で語るときは、登場人物の様子は語れるが気持ちは分からないので語ることができない。内の目で語るときは、逆に気持ちは語れるが様子は分からないので語ることができない。(登場人物との目の重なり)

#### 〈例 1〉

ぬま地にやってくるガンのすがたが、かなたの空に黒く点々

と見えだしました。先頭に来るのが、残雪にちがいありません。その群れは、ぐんぐんやって来ます。「しめたぞ。もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にも物を見せてくれるぞ。」

ここでは、語り手の目が大造じいさんの目と重なっているからこそ、大造じいさんの「」内の気持ちが語れるのである。それと同様なのが次の箇所である。

〈例 2〉

ところが、残雪は、油断なく地上を見下ろしながら、群れを率いてやって来ました。そして、ふと、いつものえさ場に、昨日までなかった小さな小屋をみとめました。

「様子の変わった所には、近づかぬがよいぞ。」かれの本能は、そう感じたらしいのです。ぐっと、急角度に方向を変え、その広いぬま地のずっと西側のはしに着陸しました。

今度は語り手の目が、残雪の目と重なっているのである。そして、残雪がなぜ急角度に方向を変えたかを読者に分かるように語っているのである。

② 五感からの描写

プロローグの終わりに、次の描写がある。

〈例〉

さあ、大きな丸太がパチパチと燃え上がり、しょうじには自在かぎとなべのかげがうつり、すがすがしい木のおいのするけむりの立ちこめている、山家のろばたを想像しながら、この物語をお読みください。

・ 「パチパチ」――音――耳（聴覚）からの描写

・ 「かげがうつり」――目（視覚）からの描写

・ 「木のおいのするけむり」――鼻（臭覚）からの描写

③ 言葉と言葉をつなぐ

子供たちは一つ一つの言葉には反応を示すが、他の言葉と関わらせて読みを広げたり深めたりすることがあまり見られない。そこで取り上げたのであるが、「つなぐ」というのは「関わらせて読む」ということである。

〈例 1〉

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、なかなかりこうなやつで、仲間がえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。（中略）

そこで、残雪がやって来たと知ると、大造じいさんは、今年

こそはと、かねて考えておいた特別な方法に取りかかりました。それは、いつもガンのえをあさる辺り一面にくだいを打ちこんで、タニシを付けたウナギつりばりを、たたみ糸で結び付けておくことでした。

・「特別な方法」とは「ウナギつりばり作戦」であることは説明で分かるが、なぜこのような方法にしたのかは、「りょうじゅうのとどく所まで、人間を寄せつけませんでした」と関わらせることによって理解ができる。

#### 〈例 2〉

今年も、残雪は、ガンの群れを率いて、ぬま地にやって来ました。(第一場面)

そのよく年も、残雪は、大群を率いてやって来ました。(第二場面)

さて、いよいよ残雪の「群」が今年もやって来たと聞いて、大造じいさんは、ぬま地へ出かけていきました。(第四場面)

・残雪がガンを率いて来ることは同じだが、率いるガンの表現の仕方がそれぞれの場面で「群れ」「大群」「一群」と異なっている。言葉と言葉を関わらせてみると表現の工夫にも着目することができ

#### ④ 伏線

物語には後の方で述べる事柄をあらかじめ前の方ではのめかしている場合がある。それを「伏線」と言う。

#### 〈例〉

じいさんは、一晚じゅうかかって、たくさんウナギつりばりをしかけておきました。今度は、なんだかうまくいきそうないきがしてなりません。(第一場面)

「羽だけであつたが、生きているガンがうまく手に入ったので、じいさんはうれしく思いました。(第二場面)

・第二場面の「一羽だけであつたが、生きているガンがうまく手に入った」ということが、第一場面の「なんだかうまくいきそうないきがしてなりません」ではのめかされている。

#### ⑤ 言葉を別の言葉に置き替える

自分の知っている言葉に置き替えることにより、言葉の理解や内容の理解を深めるためである。

#### 〈例 1〉

これも、あの残雪が、仲間を指導してやったにちがいありません。

「ううむ。」

大造じいさんは、思わず感たんの声をもらしてしまいました。

・「ううむ。」を別の言葉に置き替える。

・「やられた。」「なんというやつだ。」「すごいやつだ。」「まいった。」など。

〈例 2〉

残雪は、あの長い首をかたむけて、とつ然に広がった世界におどろいたようでありました。

・「広がった世界」を別の言葉に置き替える。

・「自由な世界」「頭領の世界」「頭領として采配をふるう世界」「なつかしい世界」「大群を率いる世界」「前の世界」など。

⑥ 前の場面とつなぐ

「③ 言葉と言葉をつなぐ」で述べたことと同じだが、子供たちはともするとその場面だけを読みがちで、前の場面と関わらせて読むことが希薄である。そこで、各場面というのは、だんごの串刺しになっているのではなく、二場面は一場面を包みこんでいる場面であり、三場面は一・二場面を包みこんでいる場面であり、最後の場面はそれまでの場面を全部包みこんでいることを指導し、前の場面とつないで読むことの必要性を説明した。

〈例 1〉

もう少しでたまのとどくきよりに入ってくる、というところで、またしても、残雪にしてやられてしまいました。(第三場面)

残雪は、このぬま地に集まるガンの頭領らしい、なかなかりこうなやつで、仲間がえをあさっている間も、油断なく気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけませんでした。(第一場面)

・大造じいさんは、「もう少しでたまのとどくきよりに入ってくる、というところで」「してやられてしまいました」と第三場面にある。残雪が、「昨日までなかった小さな小屋」に不審を抱いて回避したのであるが、そのことは第一場面に「油断なく気を配っていて、りょうじゅうのとどく所まで、決して人間を寄せつけません」と書かれていることと対応する。これをつなぐことによって、大造じいさんの作戦の甘さが浮かび上がる。

〈例 2〉

「おうい、ガンの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつを、おれは、ひきょうなやり方でやつつけたかあないぞ。」(第六場面)  
大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらい

ました。が、なんと思っただか、再びじゅうを下ろしてしまいました。  
(第五場面)

第六場面で大造じいさんは、「ひきょうなやり方でやつつけたかあないぞ」と言っているが、「ひきょうなやり方」とはどんなやり方のことを言っているのか。第五場面に「大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました」とある。このときは、残雪がハヤブサと生死をかけて戦っている真っ最中である。しかし、大造じいさんは、「が、なんと思っただか、再びじゅうを下ろしてしまいました」とある。じゅうを下ろしたのは、ハヤブサと必死に戦う残雪をねらうことに躊躇したからである。躊躇したのは、「ひきょうなやり方」だからである。残雪と一対一で真正面から戦うことを潔しと考えたのである。五場面とつながることによって、「ひきょうなやり方」を説明することができるのである。

#### ⑦ 気持ちの変化

子供たちはその場面ごとの気持ちを読み取ることはできる。しかし、その気持ちが場面ごとにどのように変化していくかということにまで目が届かないことが多い。これは前述の「前の場面とつながり」と同様である。物語の中で、登場人物（特に、主人公）

が一つの事件・事柄によって、どのようにものの見方・考え方が感じ方が変わっていったかを読み取らせることは、主題を読み取らせることだけでなく人間形成の面からも不可欠なことである。

大造じいさんは、このぬま地をかり場にしていたが、いつごろからか、この残雪が来るようになってから、一羽のガンも手に入れることができなくなったので、いまいまいしく思っていました。  
(第一場面)

しかし、大造じいさんは、たかが鳥のことだ、一晩たてば、またわすれてやって来るにちがいないと考えて、昨日よりも、もっとたくさんのつりばりをばらまいておきました。  
(第二場面)

「ううむ。」

(第二場面)

大造じいさんは、思わず感たんの声をもらしてしまいました。  
(第三場面)

「しめたぞ。もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは目にも見せてくれるぞ。」  
(第三場面)

大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、  
「ううん。」

と、うなっていました。  
(第三場面)

「さあ、今日こそ、あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ。」

(第四場面)

大造じいさんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しては、  
ような気がしませんでした。(第五場面)

「おうい、ガンの英ゆうよ。おまえみたいなえらぶつを、お  
れは、ひきょうなやり方でやつけたかあないぞ。」(第六場面)

・第六場面で大造じいさんは、残雪に「ガンの英ゆう」「えらぶ  
つ」と最大の賛辞を送っているが、それまでの大造じいさんの心  
(気持ち)の変化を見ていかなければならない。第一場面では残  
雪のことを「いまいまいしく思っていました」、第二場面では「た  
かが鳥のことだ」、第三場面では「目にも物を見せてくれるぞ」、第  
四場面では「あの残雪めにひとあわふかせてやるぞ」と敵対視し  
ている。しかし、各場面が進む中で残雪の頭領としての判断力、  
叡知を認めざるを得なくなってきた。第二場面の「感たんの  
声をもらしてしまいました」、第三場面の「『ううん。』と、うなっ  
てしまいました」、そして決定的なのが、第五場面の「大造じい  
さんは、強く心を打たれて、ただの鳥に対しては、ような気がし  
ませんでした」である。それが「ガンの英ゆう」「えらぶつ」と  
いう言葉になったのである。

#### ⑧ 情景と気持ち(心情)

子供たちは、情景描写は単に情景描写として読んでしまうのが

大半である。それで、情景描写には、登場人物(特に、主人公)  
の気持ちを反映している、気持ちがその裏にあるという読み方を  
指導したものである。

#### 〈例〉

秋の日が、美しくかがやいていました。(第二場面)

あかつきの光が、小屋の中にすがすがしく流れこんでまし  
た。(第三場面)

大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりと  
しました。(第四場面)

東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。(第四場面)

・第二場面の「美しくかがやいて」からは、大造じいさんの昨日  
の喜びの名残りと今日の成果への期待、第三場面の「すがすがし  
く」からは、作戦通りに進んでいるという満足感、第四場面の  
「青くすんだ空」からは、大造じいさんに迷いが一点もなく我に  
勝算ありという自信、「真っ赤に燃えて」からは、大造じいさん  
の何としてでもという意気込みの強さが表れている。

#### ⑨ 読点「、」のプロミネンス

読点は音読するときに切るところというのが、子供たちの認識  
である。それだけではなく、読点によって意味を強くする(プロ

ミネンス、強調）効果もあることを指導したのである。

〈例〉

不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。が、ヤブサも、さるものです。（第五場面）

いつまでも、いつまでも、見守っていました。（第六場面）

読点のある・なしで比較をしてみる。

「さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。」

「さすがのハヤブサも空中でふらふらとよろめきました。」

どちらもハヤブサがふらふらとよろめいたのであるが、「さすがのハヤブサも、」の方は「あの猛禽類の強さと速さを持つハヤブサでさえもよろめいた」という衝撃の強さを感じさせる。それに対して、「さすがのサヤブサも」は読点のあるほどの強い衝撃は感じられない。

「ハヤブサも、さるものです。」

「ハヤブサもさるものです。」

これも前述したことに同じように、読点のある方は「何といってもハヤブサはハヤブサ」であることを強調している。それに比べて、読点のない方はさらにハヤブサの強さを言っている。

「いつまでも、いつまでも、見守っていました。」

「いつまでもいつまでも見守っていました。」

読点のある方はない方と比べると、見守っている長さで見守る大造じいさんの思いの強さを感じられる。

⑩ 辞書の意味を本文に置き替える

子供たちは辞書で文中の難語句を調べてきているが、単に意味を調べてきているだけで、それを文脈に応じて活用するということが見られないので指導したものである。

〈例〉

C 「雪のように清らかに」から読み取ったんですが、「清らかに」を辞書で引いたら「濁りのないこと」と出ました。「雪のようにきれいに」でもおかしくないのに「清らかに」と書いてあるので、清らかに散っていることを強調していると思います。それで、大造じいさんはさわやかな気持ちで見送れることが読み取れます。

C 辞書で調べたら、「清らか」は「すがすがしい」と書いてありました。大造じいさんは、前はたかが鳥としか見ていなかったけど、今は残雪によかったといういい気持ちを持っていると思います。

C 「らんまん」を辞書で引いたら「美しく咲き乱れるさま」と書いてありました。こんなに美しく咲き乱れている春の朝



に残雪を飛び立たせたから、大造じいさんはとてもさわやかですがすがしい快い気持ちだったと思います。

- これは第六場面の授業記録の中の子供の発言である。単に辞書の意味だけの発言ではなく、辞書の意味を自分なりに咀嚼して文脈と絡ませ、大造じいさんの気持ちに言及している。

#### ⑪ 言葉と比較する

本文の言葉と本文の言葉を一部抜いた言葉とを比較させることによって、意味を正確に理解させるためである。次のような発問を行った。

##### 〈例〉

- 「今年も」と「今年は」とを比べてみよう。
- 「飲みこんだものらしい」と「飲みこんだ」とを比べてみよう。
- 「もらしてしまいました」と「もらしました」とを比べてみよう。
- 「残雪め」と「残雪」とを比べてみよう。

- 「今年も」は、昨年も、その前から、と続いている。
- 「飲みこんだものらしい」は、確かではないが大造じいさんが推測したこと。

- 「もらしてしまいました」は、大造じいさんはそんなつもりがないのに自然に心の中で思ったことが外に出てしまった。

- 「残雪め」は、いつも残雪にしてやられている恨みからののしかった言い方。

#### ⑫ 遠近法

子供たちは絵を描くとき、無意識に近くのもの大きく遠くのものは小さく描いている。それは「遠近法」と言い、物語にもその描き方があることを指導したものである。

##### 〈例 1〉

ぬま地にやって来るガンのすがたが、かなたの空に黒く点々と見えだしました。先頭に来るのが、残雪にちがいありません。その群れは、ぐんぐんやってきます。

- 大造じいさんから見て、ガンが遠くから次第に近くへとやって来る描写

##### 〈例 2〉

バシッ。  
快い羽音一番、一直線に空へ飛び上がりました。  
そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れとした顔つきで見守っていました。

いつまでも、いつまでも、見守っていました。

・大造じいさんのいるところから、残雪が次第に遠ざかる。「近」から「遠」への描写

⑬ 表情や体の姿勢など様子を想像する

子供たちは、様子が書かれている言葉を指摘することはできる。しかし、その様子のイメージ化がなかなかできない。イメージ化できれば、まるでその場に居合わせたような思いの読みができる。イメージ化させるということは、想像力を培うことにもなる。

〈例〉

「しめたぞ。もう少しのしんぼうだ。あの群れの中に一発ぶちこんで、今年こそは、目にも見せてくれるぞ。」りょうじゅうをぐっとにぎりしめた大造じいさんは、ほおがびりびりするほど引きしまるのでした。

・大造じいさんの様子を想像させるためには、少し前「そこで、夜の間に、えさ場より少しはなれた所に小さな小屋を作って、その中にもぐりこみました。」の文の「小さな小屋」「もぐりこみました」を押さえておく必要がある。大造じいさんが今どこでどうしているのかということである。

顔の表情――緊張した顔つき、こわい顔、あらあらしい顔、いか

つい顔 など

目――かっと見開いた目、大きな目、鋭い目、射るような目、こ

わいような目 など

口――歯をくいしばっている、きゅっと結んでいる、への字にしている など

頬――びりびりするほど引きしまっている、かたくなっている、こわばっている など

腕――りょうじゅうをぐっとにぎりしめている、力が入っている、力こぶができている、力がはいつて小さくふるえている など

足――あぐらをかいている、膝をついている、投げ出している など

体の姿勢――すわっている、しゃがんでいる、立ち腰になっている など

⑭ 図で表す

子供たちにとって、位置関係、動き、地形、方角などが言葉だけでは理解しにくい場合がある。それを具体的にするために図で表すように指導したものであるが、図で表すためにはより注意深く読まなければなくなる。

〈例〉

ガンの群れを目がけて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。

「ハヤブサだ。」

ガンの群れは、残雪に導かれて、実にすばやい動作で、ハヤブサの目をくらしながら飛び去っていきます。

「あっ。」

一羽、飛びおくれたのがいます。

大造じいさんのおとりのガンです。長い間飼いなさらされたので、野鳥としての本能がにぶっていたのでした。

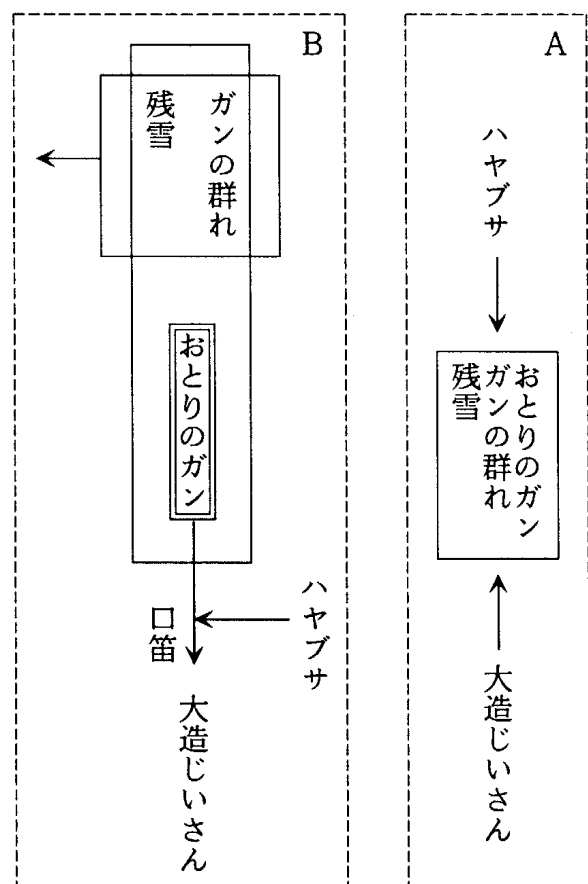
ハヤブサは、その一羽を見のがしませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュ、と口笛をふきました。

こんな命がけの場合でも、飼い主のよび声を聞き分けたとみえて、ガンはこちに方向を変えました。

ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりしました。

• この場面のガンの群れ、おとりのガン、ハヤブサ、大造じいさんを図式化すると次のようになる。(A↓B)



⑮ ギ音(声)語、ギ態語

子供たちは、擬音(声)語や擬態語について漠然とは知っているようだが、どの言葉が擬音(声)語なのか擬態語なのか曖昧であったので、次のことを説明した。

擬音(声)語は、実際の音(声)をまねて言葉にしたもので、「さらさら」「ざあざあ」「わんわん」などがある。

擬態語は、視覚や触角など聴覚以外の感覚からの印象を言葉にしたもので、「にやにや」「ふらふら」「ゆったり」などがある。

〈例〉

- ・「バタバタ」「ヒューヒューヒュー」「グワア、グワア」「ピュ、ピュ、ピュ」「パーン」「バシッ」「ぱっ ぱっ」
- ・「わくわく」「ぐんぐん」「ぐうと」「びりびり」「ふらふら」「ぐったり」「じたばた」「はらはら」

本文中の擬音（声）語が前半のもの、擬態語が後半のものである。

⑬ 文の短さ

私は教材解釈をするとき、全文を視写することになっているが、一文ずつ行変えをして視写をする。そうすると一文の長短が明確になり、なぜ長いのか短いのかを内容と絡ませて考えることができるからである。子供たちにその視写は行わなかったが、文の短さは何を意味するか考えさせたかったから取り上げたのである。

〈例〉

「あっ。」

「羽、飛びおくれたのがいます。」

大造じいさんのおとりのガンです。

長い間飼いならされていたので、野鳥としての本能がにぶっていたのでした。

ハヤブサは、その一羽を見のがしませんでした。

じいさんは、ピュ、ピュ、ピュと口笛をふきました。

こんな命がけの場合でも、飼い主のよび声を聞き分けたとみえて、ガンは、こっちに方向を変えました。

ハヤブサは、その道をさえぎって、パーンと一けりけりました。ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。

ガンの体はななめにかたむきました。

もう一けりと、ハヤブサがこうげきのしせいをとったとき、さっと、大きなかげが空を横切りました。

残雪です。

大造じいさんは、ぐっとじゅうをかたに当て、残雪をねらいました。

が、なんと思ったか、再びじゅうを下ろしてしまいました。

残雪の目には、人間もハヤブサもありませんでした。

ただ、すくわねばならぬ仲間のすがたがあるだけでした。

いきなり、敵にぶつかっていきました。

そして、あの大きな羽で、力いっぱい相手をなぐりつけました。不意を打たれて、さすがのハヤブサも、空中でふらふらとよろめきました。

が、ハヤブサも、さるものです。

さっと体勢を整えると、残雪のむな元に飛びこみました。

ぱっ

ぱっ

羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。

そのまま、ハヤブサと残雪は、もつれ合って、ぬま地に落ちていきました。

大造じいさんはかけつけました。

例として取り上げた文章は、一文ごとに行変えをしたものである。このようにしてみると、一文の長短が明白になる。傍線の文は短い文である。短い文が続く場合は、急な展開、スピード感、臨場感を表している。この場面は、ガンの群れがハヤブサに襲われ、おとりのガンがハヤブサが狙われる。それを残雪が助けに入り、ハヤブサとの激しい戦になるクライマックスである。そのため、短い文の羅列によってテンポよく描かれているのである。

## ⑰ 色どり

テレビでは映像を使って、人物や情景を描き出す。顔、形、みなり、人柄、言動、心情、自然などを色彩、明暗、音などを駆使して映し出す。物語の世界も言葉でこそ表現するが同じことなのである。ただ目の前にあるのは、挿絵こそあるが黒い活字がなら

んでいるので、子供たちはそれが「色どり」のある世界であることに気づかず、事柄だけを読んでしまう。それで「色どり」の色彩、明暗、音の内、特に色彩を取り上げたのである。

### 〈例〉

- ・ 左右のつばさに一か所ずつ、真っ白な交じり毛を持っていたので、かりゅうどたちからそうよばれていました。
- ・ ぬま地にやって来るガンのすがたが、かなたの空に黒く点々と見えだしました。
- ・ 大造じいさんは、青くすんだ空を見上げながら、にっこりとなりました。
- ・ 東の空が真っ赤に燃えて、朝が来ました。
- ・ ガンの群れを目がけて、白い雲の辺りから、何か一直線に落ちてきました。
- ・ ぱっと、白い羽毛があかつきの空に光って散りました。
- 羽が、白い花卉のように、すんだ空に飛び散りました。
- 残雪は、むねの辺りをくれないにそめて、ぐったりとしていました。

使われている色彩は、「白」「黒」「青」「赤」「くれない（紅）」の五色である。

## ⑱ 現在形

子供たちが知っている文末表現といえば、敬体と常体だけである。その外にも過去形と現在形があること、多くは過去形で書かれているが印象づけたいところだけ現在形にする書き方があることを取り上げたのである。

### 〈例〉

- ・ ガンの群れは、残雪に導かれて、実にすばやい動作で、ハヤブサの目をくらしながら飛び去っていきます。
- ・ 一羽、飛びおくれたのがいます。
- ・ 大造じいさんのおとりのガンです。
- ・ 残雪です。
- ・ が、ハヤブサも、さるものです。

・ 現在形は全体的にはほんの少ししか使われていないが、その大部分はハヤブサと残雪との戦いの場面に使われている。これは戦いの臨場感やスピード感と共に、おとりのガン、残雪、ハヤブサを印象づけるためである。

## ⑲ 繰り返し

子供たちは「繰り返し」というの知っているが、それは同じ言葉の繰り返しだけだと思っている。類似の言葉の繰り返しは違う

と思っているので取り上げたのである。

### 〈例〉

- じいさんが小屋に入ると、一羽のガンが、羽をばたつかせながら、じいさんに飛び付いてきました。
- このガンは、二年前、じいさんがつりばりの計略で生けどったものだったのです。今では、すっかりじいさんになついています。ときどき、鳥小屋から運動のために外に出してやるが、ヒュー、ヒュー、ヒューと口笛をふけば、どこにいてもじいさんの所に帰ってきて、そのかた先に止まるほどに慣れていました。
- ・ 「飛び付いて」「なついて」「なれて」と類似の言葉の繰り返しによって、大造じいさんと緊密な関係にあることを強調している。

## ⑳ テレビカメラの画面

語り手が、登場人物や情景に近づいて見たり遠くから見たりする場合がある。それと同じことが、テレビの画面にも映し出される。それはテレビカメラによるスーム・インやズーム・アウトによる手法である。そのことを理解させたいとして取り上げたものである。

### 〈例〉

そうして、残雪が北へ北へと飛び去っていくのを、晴れ晴れと

した顔つきで見守っていました。

いつまでも、いつまでも、見守っていました。

・ 「晴れ晴れとした顔つきで見守っていました」はズーム・イン、「いつまでも、いつまでも、見守っていました」はズーム・アウトである。

おわりに

記述してきた二十の「読み取りの視点」は、子供たちが読むときの手がかりとなるものである。一般的に子供たちは物語文を読むとき、様子や気持ちや表現のよさを読み取ればよいことは理解していると思われる。それは先生から「どんな様子ですか」「どんな気持ちですか」「表現のすばらしいところはどこですか」という発問をいつもされているからである。しかし、子供たちは、その様子や気持ち、表現のよさをどのようにして読んだらよいのかと苦しい思いをしているのではないだろうか。例えば悪いが、子供たちは武器を持たず、素手で文章と戦っているようなものである。前述の子供からのメッセージでは武器を持って読むことを歓迎し意欲を示している。このような「読み方の指導」をしてやることが、国語の本質的なところでの「魅力ある国語教室」となるのではないだろうか。

〈参考文献〉

・ 国語大辞典

(小学館)

・ 広辞苑

(岩波書店)